Caesalpinia sappan （　スオウ）

茜　新衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃａｅｓａｌｐｉｎｉａ　ｓａｐｐａｎ　（　スオウ　）

【Ｎコード】
Ｎ０９９７Ｘ

【作者名】
茜　新衛門

【あらすじ】
地方で開かれたロックイーゼン選抜大会で優勝したラティーフはレイステン都市の闘技場で出場することになった。
ロックイーゼンの発案者オーケシュストは統率者、演出者、スカウトマンとしての力を発揮し大成功。

峡谷の町バッファロー

良く晴れわたった空の下。
いつもは村の子供の遊び場になっている広場にはごろ石に板を渡しただけの簡単な台ができて
迷路を作るようににわか露天が立ち並んでいる。

都会から遠く離れた山間の集落では月に一度の市場が村民の社交場でもある。

国の北側に聳えるカヤンデル山脈は氷河が溶けていく筋もの水の流れが岩と土を削り下へ下へと流れ深い深い峡谷をあちらこちらと作り、谷の僅かな傾斜地に点点と分散して人々は住み着いている。

比較的住人の多いバッファローの村では一ヶ月も前からこれまで村民が見たこともない珍しいポスターが市場の軒先の柱に巻きつけられて話題になった。

ポスターには都会で有名なロックイーゼンの競技者が美しい肢体を跳躍させて見せ付け村人の目を引く。
バッファローではレースと言えばは牛や馬が時には鶏や豚アヒルがするものだと思っていた。
村人は人が走り飛ぶスポーツに驚きスカウトされる参加者を募ったポスターの噂はとんでもない速さで村から村に伝わり自他共に認めるすばしこい若者達が集まり市場を一層賑わしていた。

ポスターを貼った興行主オーケシュストはレイステンの大都市で有名な男。
土地の有力者をおだて上げロックイーゼンの宣伝と選手獲得を約束し

ロックイーゼンに出られるだけの運動能力の有る人間を発掘するのが目的で来ている。
だが広い荒地と山並みを越えすぎて人間のいない秘境にまで足を伸ばしたのではと後悔し始めてもいる。

確かに村長は絶景の美しい村だと電話では言ったが
絶壁の崖の道は緑色の苔に覆われて美しいが人が歩く場所ではないというのがオーケシュストの感想だ。

「顔は望んじゃいねぇ。必要なのは体力だ。跳躍力だ。瞬発力だ。パワーだ。こんな田舎まで来たんだ一人ぐらいましなのがいるだろう?はん?顔が良くて運動能力の優れた奴なんて都会にはごろごろいるさ、だがな奴らはすぐに故障しちまう。それによう顔だけがいい奴ってのはすぐに飽きられちまう。色々と普通なのから不細工なのまでいなきゃ顔の良い奴が目立たないだろう?まったくもってここには文明の利器ってのは無いのかね。サウナにでも浸かってる気分だぜ」

段々畑の真ん中に大きなキャンピングカーを止めて
タ―フの影で折りたたみ椅子にふんぞり返って市場に来た人々をオーケシュスト等は見下ろしている

手持ち無沙汰を説明するようにじっとりと汗ばんだあごを拭い緑深い山並みをあきれ返って眺める。

都会に無い奇想天外の顔を期待していたのに集まったのは素朴で冴えない容姿を持った若者ばかりである。
オーケシュストの問いかけに取り巻きのひとり、ディレクターであるビルは愛想笑いを浮かべてうなずいて見せた。選考会が終わるまでは自分の意見は控えているつもりだ。

左右の山が押し寄せている峡谷の中腹には珍しく平たい土地がありその一番上の見晴らしの良い場所に陣取って募集要項を満たした若者達の予選会を観賞する。

いまどき秘境に行っても猿人のような村人など望めるわけが無いとビルは思っていても万が一面白い素材がいれば競技にメリハリが出来ると淡い期待もある。
が並んでいる候補者はしゃれた服装は一人もいない、誠実そうな普通の若者が緊張した顔つきで待っている。

ざわざわとしている人の固まりは道からはみ出るほど膨れ上がり、列の中を村長の手下が駆け回り必要な書類を提出させては書き足らぬ箇所を呼び戻しては尋ねて書類の穴を埋める・・を繰り返している。

人の固まりは歯並びと首の太さ、身長で選り分けられて半分以下に減り、案内人の号令で百人足らずの人間が市場を突き切り段々畑の間をぬって登って行き
一塊にまとまると鋭い笛の音に合わせて駆け下る。
市場を一周して沢への道をひたすら全速力で駆けおりていった。

「おおぉ。着物の裾を翻して走っていったな。磨けば光る原石が何人居るだろうか。これだけが楽しみでキャラバンについてきているんだが」
オーケシュストの言葉にかるくうなづいて手元の書類からテントの中を吹きぬける風と峡谷の向こう側にビルは目を向ける。
村長の手下が泥だらけになりながら集めた書類を持ってきている。

谷は春を迎えて木々の緑が迫ってくるように美しい。
市場では沢に下りていった参加者に注意を払う者はわずかで皆久しぶりの市に集まってきて品物の値踏みに余念がない。
「なぁこれもうちょっとないか？あとな五本あればちゃんとまとまって一つの瓶に一杯になるんだがな」
「すまねぇな。今年の春はこれで精一杯だで。なんと言ってものう山族が下りてこねぇからの話にならねぇわ」
「そういやぁー最近姿見ないなぁ」
「わしん所も欲しいものがあるだが。もう手にはいらねかなぁ」
「うんだなぁ」
二人の村人の視線の先は峡谷の奥。険しい山肌が連なりその奥に又ケラスの峰々が続いている。
恐らく山族の村はその向こうにあると思われた。

市場の喧騒に負けない騒がしい声が下の沢から大きくなってきている。
耳ざとく村長が、
「ほう！もう帰ってきたがや。早いがな」と叫び、
腕時計を見て満面の笑顔になる。

市場にいる人々は沢から上がってくる人影の登場を待った。
「何！もう戻ってきたか。おい又コーディネーターが走路を短くしてるんじゃないのか？」とはオーケシュスト。
テントの中で椅子から立ち上がったオーケシュストに合わせてビルやその取り巻きもぶっつりと絶ち切れた市場の端を見つめる。

参加者の身内の叱咤激励の大声がはっきりきこえる。
その声にひきつけられて市場の人々も手を止めて道路の縁を見つめている。

人々の見守る中に先頭を走る農作業着の一人の女性が現われた。
その後からつばを飛ばしながら声援している人が現われ一歩一歩と大地を踏みしめる足元の怪しい男達が駆け上ってきていた。

広場の中央の壇上に村長の手下に誘導され優勝した女性が汗まみれの顔を手で拭いている。
「あんた！いいね！一番だよ！」と村長の明るい声。
街から来たキャラバン隊に優秀な人材を提供できると村長は鼻が高い。

村長は参加者全員に順位をつけて戻ってきた手下に指示を出して小さな板舞台の周りに集めると
仰々しく一番に戻ってきた女性を横に村長は彼女の功績を讃えてこれからの可能性を繰り返し大声で力説した。

参加者が戻ってきたと同時にテントから出てオーケシュストが急場造りの壇上にあがると
上気した顔の村長が田舎臭い女性の手を取って万歳の音頭をとる。
それに合わせてオーケシュストも満面の笑顔で村長にお礼を言い市場に居る全員を、村民の全てを、そして女性を育んだ交通機関の乏しい峡谷を褒め称えるスピーチをした。

壇上では儀式として一枚の紙が女性の前に差し出されそれに女性がサインをすると村長はその書類を広場全員に見せるように高く上げて胸を張った。
オオーッという声と羨望のまなざしがその書類に送られ満足そうに村長と優勝者が壇上から降りると
広場に居る人間の関心事は又来年のコンテストの候補者に向けられていた。

オーケシュストが村長との挨拶を終えてキャンピングカーに戻る頃には山の間にお日様が傾き始める。
「何とかまともな奴が居たじゃないか。田舎の雰囲気も存分に味わったし。次は何処だ？後何箇所回ればいいんだ」
キャンピングカーのステップを踏みながら後ろの秘書に尋ねる。
車にエンジンをかけさせて革張りのソファーに腰を落ち着ける。
ベタベタしていた肌が乾燥していく。

秘書が日程を告げるとオーケシュストの愛想の良い笑はどこかに消えて、
一番に戻ってきた女性の書類と契約書を見て新しく編成しなおすメンバーの選考を始めた。

基本一チーム二十四人で（途中で八人に分けられる）最初は個人戦このときに個々の資質を吟味する。
次が総当りのリーグ戦。そこから上位八組をトーナメント方式で競わせる。それぞれを賭けの対象とし優勝チームのタイムを予想させるのだ。

オーケシュストは親の代から興行師で地方では古くからの家畜を対象にしたレースと賭博がありその一つを受け継いだオーケシュストは大都市で家畜を走らせるより人間を競わせたほうが金になると考えた。
それは個人技も見られればチームとしての団結力が必要になる新しい競技。
人数が多ければスターを作るのさえ難しくない。

幸い様ざまな競技で些細な故障で第一線を退く選手の多さが問題にもなっている。
その受け皿にもなりえる競技ロックイーゼン、闘技場のフィールド

で繰り広げられる選手達の悲喜こもごもの葛藤を絶対に客は喜ぶに違いない。
選手も一年を通しての成績で高い年棒が決まる。
オーケシュストにとってフィールドの選手たちをスターにのし上げることは簡単なことで人気が出なければすぐに裏方に回すか新しい活路を（他のスポーツに戻す）提示してやんわりと退場を願う。

オーケシュストの手法は競技の解説者にスターにすると決めた選手を美麗美句で持ち上げて観衆のイメージを膨らませるにつきる。

一ヶ月を通して、半年を通して、そして一年を通してのスターを作り上げるそのシナリオが大切なのだ。
スター性を生まれ持ったスポーツ選手や努力と経験を積みファンを磁石のように吸い付けて行く様ざまな競技の選手と違い、確実にシナリを通り短期間でスターを育て上げることができる醍醐味を味わうとこの商売はやめられない。

どんな大衆の好みにでもブームを作るのにオーケシュストは労をいとわない。
大衆は選手の汗とあわよくば懐に大金が舞い込むのを望み、さなぎから美しい蝶に変身する様を見たいのだ。
観衆の気持ちを煽るためには小さな仕掛けを作る。その作業には細心の注意が必要なのである。

興行主オーケシュスト

豪華なキャンピングカーのテーブルに広げた
紙の資料を反対側の椅子に放り投げ、
脇のパソコンを真ん中に据えてこれまで獲得した選手のプロフィールを画面に呼び出す。
小さな画像に眉根を寄せて気になる選手を何度も違う角度で撮った画像を大きくし見比べては次の選手のプロフィールに移る。

ピックアップした選手をチェックし並べ替えて表示させると満足な笑みがオーケシュストに浮かぶ。
「今年は大きく変動する。スターは決まった。夏から秋にかけての盛り上がりは半端ないぞ」
と、自分の言葉に酔いしれる。
「新人にいいのが居るんですか?それとも誰か又故障したんでしょうか」
オーケシュストとは逆の壁側に一人用の椅子で細かい箇所をパソコンでチェックしていたビルが聞く。
パソコンを閉じて顔を上げればにやけたオーケシュストの顔が目に入る。
よほど自分の立てた計画が気に入っているらしい。

「あいつ等の身体には強靭なバネと筋肉しか入ってないんだ。小さな故障ぐらいでびびるな。ありゃお涙ちょうだいのパフォーマンスなんだ」
けらけらと笑ってみせるオーケシュスト。
車内にはオーケシュストとビル以外居ない。皆移動準備にかかりきりで物資調達に奔走している。

パフォーマンスで故障する選手などいないと咽元まで出掛かるがビルは分別をわきまえてオーケシュストの機嫌を害う言葉は使わない。
ビルはオーケシュストの指先でスクロールされる画面の具合で考えを読む。
早い、疲労がたまっている証拠だ。

これまでオーケシュストのシナリオにそぐわない選手は故障を理由に競技から遠ざける傾向が頻繁にあった。
気に入らない選手は何かと理由をつけてたとえば足の曲がり形が変だとか腕の筋肉のふくらみに異常があるとか他愛ないことで医療室に追いやり精密検査を受けさせるのだ。
その間に自分の思うようにレースを変えるのがオーケシュストの姑息な手である。

ロックイーゼンの運営で何役も仕事をこなした中の、たぶん今のは観客側の気分で言ったものだろうとビルには思われた。
仕事柄選手を大事にしているイメージが強いのに今のオーケシュストの言葉はいただけないと心の中だけで反論した。
確かに商品としての一面はあるが運営者がそう言ってしまうと巨大なフィールドがクッキーの紙箱と同じレベルに思えてしまう。

ビルの冷めた目つきに気がつきオーケシュストは自分の言葉に人間味の無さに気がついた。
「サポート体制は万全なんだ君が心配する必要は無いって事。しっかりしたシナリオさえあれば誰も怪我などしないさ。そうだろう？」
あまりに自分の作ったシナリオが素晴らしかったので人形のように動かしていたことがばれたのではないとビルの様子を伺うがビルはいつもと同じ人の良い笑顔に戻っている。

人間は態度が大事だとオーケシュストは思う。

言葉は正直に舌から滑り落ちてしまうがその後のフォロー次第でどうとでも受け取ってもらえる。
失言も身内のようなビルの前だと完璧に挽回できるのだ。
現にビルの顔はにこやかな仕事モードに変わっている。
「そうですね。良いシナリオが思いついたのなら箇条書きで結構ですから書いといてください」
このビルの言い回しがオーケシュストは好きだった。
オーケシュストが馴れ馴れしくしてもビルは節度ある態度を崩さないのだ。この関係は非常に仕事をする上でやりやすい。
「ライターに任せるのは七ゲーム分でどうだろう？後の三ゲームは通常の実況中継だけでガチでやらせるとかってのは迫力満点だろう。ふっふっこうなると解説者の力量が問われる」
素晴らしい思いつきのように一人悦にいる。

オーケシュストは二人掛けの椅子に足まで乗せ腕組をした。
ピックアップした選手が走り回る姿を熱狂したファンが硬質ガラスを叩いている様子が目に浮かぶ。

「良いですね。ライターの候補は良いのが居ます。がずっとこれまでにはシナリオ通りやってきたので本物をそのまま言わせるとなると意外とアドリブが利かない実況中継になる恐れも覚悟しなければなりませんね」
オーケシュストにこりと微笑んでみせ会場の仕上がり具合に目を通す。

又砂のことでメールが来ている。
役所からは選手が万が一落ちた場合の砂の深さで折り合いがつかない。厚さ六十センチのマットレスを引けと最後にはある。
いつものことだが前回も前々回の答申にも同じことで回答したのに新しくファイルを作るのも時間の無駄で事務所に保存してあるファ

イルを転送するように指示のメールを出す。

ビルの目の端ではオーケシュストがニューフェィスを前ににたにた笑が消えない。

「う〜〜ん。やはり選手一人ひとりに面白いシナリオが必要」

と突然思いついたようにオーケシュストが言うロックイーゼンが始まった頃一人ひとりの選手にモチベーションを上げるためにもライターをつけたがシナリオの使用頻度が低く金ばかり使ったと言われた事を忘れているようだ。

「時間のあるときにでも作ってくだされればよろしいですよ」

笑顔を絶やさずにビルは言った。

シナリオを書くのが大好きなオーナーに頼むのが一番だとビルは心得ている。

実際はライターが全部手直しするがオーケシュストが手出ししていればその試合の結果はなんと言われようとも編集に時間をかければ最高に盛り上がり視聴率も取れる。

ＴＶ用に編集しすぎるのは良くないが、試合途中で怪我をした選手は競技場まで足を運んだ観客だけが知り、次の掛け金をかけるときの情報提供不足として何度もこの不平等を槍玉に上げられて居るがＴＶはショーとして観るものと主張するオーケシュストの意見が勝ち番組の最後で本日の故障者としてテロップで名前を出すことでお茶を濁している。

日頃レイステンで都市の役人や国の役人からの苦情、に対処しロックイーゼンを広めるため幅広くいろんなパーティにも顔を出して多忙なオーケシュストが息抜きのためにこのキャラバンに参加しているのだがどうもその態度からだと息抜きというより、より以上にのめりこみロックイーゼンをショー化して高値をつけて別会社にでも

売り飛ばす気ではないかと思えるくらい最近はメディアへの露出度が激しい。

しかし故障した選手の賠償金額は大きいし、都市の条約、規約に触れていないか地域の住民に対しての苦情も全てオーケシュストは矢面に立ち裁判所から役所地元民の説明会にまで顔を出している姿は横についているビルが見てもロックイーゼンへの熱意で溢れている。この娯楽競技ロックイーゼンも何人もの政治家を抱き込んで始めた事業である。

興行主としての支出もかなりの額を出してもいるし政治家への献金も半端なく大きいこともビルは知っている。

目の前のオーケシュストを見る限り会社を売る心配よりもロックイーゼンの全てに君臨し牛耳るのが彼の最終目的ではとチラリとビルの頭をよぎる。

ビル

バッファロー地区優勝者ラティーフの名前が
プレロックイーゼン出走メンバーの中にアネルとして書き込まれ
中央の電光掲示板に華々しくお目見えしたのはそれからニヵ月後。

ロックイーゼンの競技場はレイステン市に本拠地を持つ巨大なレジャーランドの隣にアスレチック部門を担当する円形闘技場として増設された。
冬場には一般人に解放されて安全器具をつけたロックイーゼン体験希望者が競技アトラクションを利用し
春から夏にかけては総勢二百人のアスリート達が難解なアトラクションを個人のためチームのためにクリアしていく姿が見られる。

広い闘技場の観客席を埋め尽くすのは純粋に選手の躍動する肉体を観賞する目的と
賭けた金が自分の予想通りにそれ以上に膨らむことを望んでいる人間である。

ロックイーゼンが映像で放映されると地方にまで場外券売り場が設けられ
闘技場の許可を出したレイステン都市、地方の市町村とオーナーのオーケシュストとでこの競技のうまみを吸い上げた。
金のなる木だと解ると他にも様ざまな参入者、雑誌や新聞、関連グッズ商品、主に公認されたブロマイドと際どいアングルから写された写真集も収入源となりＴＶ画像の切り売りも多く出回って経済の流通に一役買っている。

観客が最初に巨大な競技場を見上げた時に必ず目に入るように作ら

れた
電光掲示板の映像モニターを見て機嫌が良いのはーケシュスト。
足元から部屋の天井まで届く硬質ガラスの向こうに闘技場の全容が肉眼でも見える場所。
設置した全部のカメラの映像をも見られる特等室・・主調整ルームの椅子に座りそっくり返っている。

見ているのはスカイカメラのリハーサルで映像が変わるたびに選手のいない壁を見ている。
「いいだろう、今年の新人は育てがいの有る選手が多い。このネーミングいい。やたら長いのもいけない短すぎるのもダメなんだ。ンフッ、ファンが勝手に短くして呼ぶのはＯＫ」

外の電光掲示板と連動して動くホールの映像に選手の名前が順に映し出されるとフンふんと鼻息が荒くなる。掲示板の調子は最高にいい。

隣に居るビルはチラリとモニターを見て、からかって気になる短い名前を言ってみた。
「アネル?を短くしたら??」
ビルは塗り替えた壁に変な影はないか切り替わる画像を見てチェックしている。
「そんなのはファンが考えるさ。Ａから始まっているからってそいつから聞くな。素敵な名前の選手は何人も居るんだぜ」
アネルは適当につけらしいとビルは予想した。
オーケシュストの中ではニックネームで呼ばれる選手は全て決まっている。
本人だけがお気に入りの選手だけだが。

しかたなくオーケシュストの機嫌をとるために長い名前を選んで言う。
「レフティハルメス」
これは綺麗に言えるとビルは思う短くすることは無い。

嬉しそうにつぼにはまったオーケシュストが答える。
「レフティーー!!いいだろう!レフティ〜〜〜〜って伸びる感じがいい!」
オーケシュストの趣味は一般受けするように考えているらしい。
「マルティンカウッピ」
これはビルにも解る。解らないのはなぜ後ろに変なカウッピをつけたかだが。
「マルティン〜〜〜」
金切り声で叫んでみせる。

名前だけで想像するのは悪いがかなりオーケシュストとしては力を入れてつけたようだ。
顔がいいだけでは人気者にはなれないのにとオーケシュストに見えない顔半分で苦笑してしまう。
「ミリーマキ」これもビルには想像できる。
「ミリィ〜〜〜」
と、どすの利いた男の声。
可愛子ちゃんを呼ぶ男性の野太い声を実演しているようだ。ということはかなり魅力的な女性に違いない。

さぁこれはどうかな?と帰ってくる返答を予想して聞く。
「ナルバントグル」
これはナルと呼んでもグルと呼んでもぱっとしない。

「バントゥ〜〜〜〜!う〜〜んこれはちょっと無理があるな」とオ

ーケシュストの返事にこの選手は十人並みの顔の持ち主だと想像出来た。
オーケシュストは自分でつけた名前なのにそのときの気持ちが思い出せない。

ビルは疑問が浮かんだ。
「新人は皆この名前を気に入ったのか？」
と笑いながら聞いた。特に最後のナルバントグルは名前というには無理がある。

「さぁ。ロックイーゼンのショーで使う名前だからどうでもいいんじゃないか」
涼しい顔で答えるオーケシュスト。まったく悪気がないだけ始末に終えない。

「そうか・・」
無駄な質問をした。
今回はかなり新人に力を入れてシーズンを盛り上げようと考えていることだけはビルには解った。

掲示板には新人戦とタイトルが光り始めその下に並んだ名前の列はレイステンでは聞いたことのない名前ばかりだ。
そういえばオーケシュストの新しい彼女はトリンゼイ国の移民だと思い出す。
それで馴染みのない名前ばかりが浮かんだと思うと適当な名前をつけられた選手たちに同情する。

ミルレンブラント

こちらは選手の控え室。
プレロックイーゼンのために集められた中堅の選手と新人達がお互いの名前を覚える場所である。

緊張した顔で近づいてきた男に立ち上がり挨拶をする。
差し出された手と衣装の下の筋肉のつき方で中堅の選手たちは新人が何処でヘタれるかを予測出来る。
「ラティーフですよろしくお願いします」

近づいてきた男は美しい逆三角形の身体に緑のフルボディスーツ。
「やあ僕はジリアスク。ラティーフ？すまないがフィールド名じゃないね。君はアネルだ今日からアネルと呼ばれるから覚えておくように。オーナーの趣味なんだロックイーゼンだけで使う名前だと割り切ってくれ」
とジリアスクは片目をつぶってみせると
周囲の緑色のフルボディスーツ姿の数を手元のパネルにチェックを入れる。
これで同じチームの新人が揃った。ジリアスクがチーム全員と顔合わせを済ませてミーティングルームへと去っていった。

ジリアスクがアネルのそばを離れるとその後姿をじっと見つめて視線を下にやりほくそ笑む女性が居た。
女性は時々苛苛した目で周囲を見ては壁一面の鏡に写った自分の顔に気がつき
口角を何度も上げては可愛らしさを誰にとも無く振りまく。
確か控え室にもカメラがあり緊張した様子の新人達の顔色が放送されたこともあったと鏡から外した視線を床に向ける。

こうすれば顔に影が出来て不安げに映る・・かもしれない。

アネルは何人かの顔見知りを探してみたが広い部屋に散らばっていて近寄ることが出来ない。
黙って足元の椅子の足だけを見つめるのにも飽きて顔を上げるときらきらした目がアネルとぶつかる。

アネルの運動能力を量り自分が上だと確信して隣の女性が声をかける。
一応同じ色のスーツ同じチームになる確率も高い。
「あたしさロックイーゼンの選手になりたくてさ、憧れていたんだけど。この服とこの化粧は無いよね薄くない？身体のライン丸見えよショックー」
ＴＶで見ていたときはウェットスーツのような丈夫な素材に見えた。

カウンター座席のように一本のポールで支えられた腰高い椅子にお尻の端だけを乗せて見事な脚線美をみせて居る金髪の女性がリラックスした表情で答える。
「あら会場に来ている観客になら私たちは動いている小さな色にしか見えなくてよ。期待していいのはＴＶ中継だけど、よっぽど良い動きをしないと私たち新人は映して貰えないわ」と美しすぎる笑顔。
今日のレースは新人戦でいわば新人のお披露目会だ。

誰に対してのお披露目かというと周辺の地域の住民とコアなロックイーゼンのファンに対するサービスである。

「本当？新人ってＴＶに写らないの？困ったわ私家族や友達に思いっきり見てって言って来たわ」
美脚の女性と自分とを見比べながらプロポーションで勝てないとわかると勝てる相手をアネルを見つめる。

大体アネルに声をかけたのになぜこの女が返事をしたのだと不服に思う。
他の新人に目を向ける。アネル同様緊張して固く口を結んでいるものが大半だ。
色分けしたスーツを着ている選手たちはざっと見ただけでは男女の区別もつかない。

大きく息を吐きながら背の高い男が会話に参加してきた。
話をしている二人は飛びっきり魅力的だ。
「一時間の放映だからな、俺達は集団シーンでなら写るかもな」
と過去の放送シーンを思い出して見る。
新人はスタートから飛び出した色の集団だ。

「編集されるからね」と美脚の持ち主。
「えーー！！ライブじゃないの。ずっと私ライブだと思っていたわ」
尖がった口元が可愛い。
「ちゃんと書類を読んだかしら。木金は予選。土曜日が準決勝、日曜日が決勝戦よそれらを編集して日曜に放映されるのよ」
いらっとした気持ちを隠して微笑んでみせる。誰もが皆スタート前で緊張しているのだ。
「今日は木曜日でもプレオープンだからＴＶ収録もないわよきっと」
にっこり笑って隣の飄々した顔を見るとなぜか安心する。まったくアネルは緊張した風情に見えない。

控え室の片隅でラティーフことアネルは近くに居た新人達との会話の中に居る。

長い髪の毛を頭頂部でまとめた美しい女性、本名ビーレル。
フィールド名をダンジェルマイア通称マイアーになる予定の選手がチャーミングな笑顔をアネルに向ける。

幅五センチのチームカラーが鼻でばってんになったペインティングがなければ花がほころぶように彼女の笑顔は美しいに違いない。

笑顔に吊られて小声でラティーフは聞いた。

「ここってそんなにすごいところなの？オーケシュストさんは楽しいゲームをしてみせて人間の運動機能の素晴らしさを世の人々に再確認させるのがここの趣旨だって言っていたわ。ロックイーゼンって新しいスポーツだって。違うの？」

ダンジェルマイアが答える前にミルレンブラントとオーケシュストに名付けられたミリーが含み笑いをかみ締めながら言う。

今は誰かと話しているほうが心が落ち着くのである。

「ロックイーゼンは人間のレースよ。ちょっと仕組みは複雑であたし達は賭けることが出来ないけれど今は１６各国で開催されてる世界中で一番人気のレースよ。カヤンデル山脈から向こう側では別ね。あちらでは家畜なんかのレースが主よ。最初はねいろんなスポーツ業界の受け皿だったんだけど今じゃね・・単純な運動よりロックイーゼンのほうが認知度が高いのよ。うふん」

あたしはその中のスター選手になるの、とミリーは会話に入っている全員の顔を見回す。

ライバルになるのは色は違うがアネルの隣の女性だと思っている。他の男女は異常に胸郭を鍛えていたりとかなり無駄の多いバランスの悪い身体付きばかり。

同じカラーのアネルはスタイルはまぁまぁだがほっそりした印象で頼りない。

「おれホイジンガー。ホイって呼んでくれそれじゃそろそろスタートラインに行こうか」

アネルとミリーとの間に同じカラーのスーツの男性が割って入って

きた。

ビルがこの呼び名を聞いたらオーケシュストに再考求めただろう。残念なことにビルが目にするのは選手の本名であっても通称名は関係ない。ロックイーゼン競技が始まりこのシーズンを無事に問題なく終わらせる事が彼の仕事である。

係員がスタートラインの手前で誘導燈をふって耳につけたヘッドフォンの声を真剣に聞き右往左往して選手らに指示を出す。

「八番、七番、四番、違う！アマリジョの周りばかりうろつくな！アスル・マリノ六番を前に、終わったらさっさと引っ込め！選手の最初の顔だぞ。ここをとっておかないと特番が組めない。足元の自動カメラ寄ってよって！目の動きを追って！そう！いいぞ！手足を動かしている奴も。そうだ！時間一杯撮るんだ。空中カメラスタンバイＯＫ？頼むぜいいアングル狙ってくれよ」

矢継ぎ早に係員の耳にはディレクターの声が飛ぶ。

ミリーがアネルの横に立つとアネルの胸を見て顔をしかめる。

「あんたそれ本物？やだーかっこわるいぃー」

「どうして？」

「ロックイーゼンに胸は必要ないのよ。うふふ邪魔なのよ。ほら後で胸が無かったらッて思うことが多いわよウフン」

隣でフックスベルガーが女同士の鞘当に口を挟むべきか考え閉じるほうを選んだ。まだ軽口を叩き合えるほど知り合っていない。

「気にすることないわ。でも気をつけてねその胸が本物ならね」

何か含みの有る言葉を残してダンジェルマイアは笑った。

おっとりとしたアネルに同じカラーでもないのについつい声をかけてしまう。

ミリーが口元を引き締めるがすぐに左端に口が歪む。
胸は身体を鍛えれば鍛えるほど脂肪分は落ちてしまう。すなわちアネルの運動量はその程度と言うことだ。
同じカラーでもここに居る全員が一応ライバルである。弱点は早く掴むに限るのである。

アルヴァー・ルーサー・フォルスストロム

セデル国レイステン市は千五百万人もの市民を抱える大都市である。都市を挟んで北と南には大きな工業地帯が広がりその賑わいを支えている。

もう一つの賑わいの源はレイステン都市が抱えるクスト湾。クスト湾には多くの交易船が行き交いここから各国に向けての工業製品が送り出され入荷されるのである。都市は空からも人を集めて内陸部に二つの飛行場を持ち航空機も人の流れを都市に集中させる要因になっている。その集まる人間の数に目をつけたのがオーケシュストグループである。

オーケシュストグループはクスト湾の一部を埋め立て大きな遊技施設を造った。それだけでは飽き足らず公的に認可された賭博とスポーツを掛け合わせたロックイーゼン競技場をその隣に増設した。人が集まれば金が落ちる・・遊技施設と競技場を取り巻くその周囲にはたくさんのホテルがひしめき立ち並び交通の便も無数に伸びて地下鉄の駅まで引っ張ってきている。

グループは市と協定を結び広大な遊戯施設クストーランドと全天候型の競技場の間に緑豊かな広い公園も設けている。公園の緑はロックイーゼンで熱くなった観客の熱気を冷まして家に帰宅させるには丁度良い静けさを保ち公園を取り囲むように立ち並ぶ高層のホテルからは昼間は公園の緑と湾の海の色の美しいロケーションを提供し夜は港の奥に行きかえう船明かりと遠くに見える眠らない街の明かりが売り物になっている。

その絵葉書のような景色を独り占めにした、遠くから見れば尖がり屋根がシンボルのホテル・シュストーの最上階から豆粒にしか見えない人の動きを楽しんでいる人間が居る。
高所恐怖症の人間なら絶対に近寄らない
ガラス張りの窓辺に腰かけ地上を眺めているのはアルヴァー・ルーサー・フォルスストロム。

地上の喧騒から離れて広い部屋の入り口ドアのそばで立っているのが従者のフォークステット・・テットと呼ばれている。
テットは年齢に似合わず地味な色のスーツで勤めである警備の仕事に徹し無表情を貫き通す。

「ストロム様・・」
テットはこれまで同様に言い慣れた言葉を使い窓辺の青年の父親の名前の一部を口にした。
この言葉でテットは一日に何度も自分を戒めている。

声をかけられた青年は地上を行きかう人々から目を離さない。
ドアが閉じた音は聞こえているのにルーサーは完全にテットを無視していた。

忍耐強くテットは言う。
「フランスマン教授から伝言でございます。明日の授業を短くしていただけないかと。学会に行く準備をしたいのだそうです」

抑制の効いた声音にとげのある声が答える。
「学会？他人の事等何も興味もないくせに。大きな研究会にだけは顔を出しておかないと忘れ去られると思っているのだろう。自分なりの証明もしてないくせに権威ばかりにしがみついている輩だ」

ルーサーのフランスマン教授への個人的分析である。

感情を表さない顔がテットを見つめる。

「あんな男の授業なんぞこっちからお断りだ。口先だけではフェルマーの最終定理を解くといっているがもう歳だ。頭の中にはカビが生えている。代数も全部知っているのか怪しいからな」

と頭から数学会では有名な教授をこき下ろす。

ルーサーが誰をどのように酷評しようともテットは動じない。

「では社会学の後に三十分入れておきましょうか」

顔色も変えずに素早くルーサーは声を荒くする。

「断れと言っている。もう僕は大学の博士課程カリキュラムは終えている。これ以上詰め込ませてどの道に進めばよいのだ。生物学か医者になって欲しいか、細菌学者か、毎日菌の培養を調べて論文を出せばいいのか?もう充分だろうそれとも学士の資格しか僕は持っていないのか」

テットを嘲笑しているのか教授を嘲笑しているのか両方をあざ笑って口の片端を上げて見せる。

「それとも・・まだこれからずっとあの男の卑猥な視線に耐えなければならないのか。あいつの頭の中は夜の伽をする男娼の事だけ、僕を見るたびに妙な笑で僕からなにかを言わそうとするあの卑劣な男との時間などもういらないだろう?テット・・お前を見るあの男のこびた視線に気がつかないのか。いかにも僕とお前等が夜な夜な如何しいことをしているのを知っているぞと笑った卑しい目だ」

フランスマン教授が男色家なのは学会の人間ならずとも有名な話である。
そもそもルーサーが他国の人間であるのに面接だけで個人教授を引き受けたのはこれが理由だとルーサーもテットも周辺の人間ならすぐに理解できることだ。
運良くルーサーが母親に似て絵画のように美しい青年だったばかりにその知性にではなく美貌にばかり誰もが関心を持つ。

フランスマン教授も例に漏れず
出会った頃は少年だったが教授はルーサーを一目見るなり小声でスポルス・・とつぶやいた。
言わずと知れた美少年で有名な名前である。

教授の驚いた顔と赤らんだ顔は見なかったことにし、そしてつぶやいた言葉も聞こえなかった振りをしたがその場にいる全員が聞き逃さなかった。

美少年から美青年へと育ったルーサーに躾け係としてテットは客を待たせることは教えていない。
「そろそろ階下におりませんんとトーマスベルグ市長が待っておられます」

忍耐と節度有る態度・・これがテットの信条である。

「僕は市長の胸を飾る花か?僕は人の目を集めるだけの飾り物の役目をするだけ為にわざわざここから目と鼻の先に行く程度で正装してあの卑しい言葉を聞きながら歩くのか?その後は市長の家族と食事。
次は?何処の王侯貴族がクストーランドに人目を忍んで遊びに来てるんだ。僕はそのたびあいつ等の飾り立てる花でなければならない

んだ」

苛立った目が冷たくテットに注がれる。

ルーサーの苛立ちはテットの苛立ちでもあるが二人でケンカをしてもこの場は始まらない。

ここは年長者のテットが二分・・我慢すれば良い。

「参りましょう」

辛抱強くルーサーを促す。

長身のルーサーが窓辺から離れて動き始めると冷たい冷気が人間の身体をもって移動する。

「くソッたれ！市長も議員も死んじまえ！偉そうに裏では汚いことばかりして正義面して何が家族愛だ。スローガンに嘘ばかり掲げるな。刺客も僕なんか狙わずあいつ等を殺せば世の中が明るくなる」

美少年スポルスと表現されたルーサーは口汚い言葉を吐きながら棚から目の色と同じグリーンのスカーフを取ると器用にカラーの下に巻きつけ横に結び目を置いた。

渋い灰色のスーツにスカーフは首元に良く映えている。

二十年ルーサーを見てきたテットはルーサーに同情しつつも気持ちは顔には出さない。

ずっと彼には言い聞かせてきている。

ガイネス王国の準備が出来次第道は開けると。

エレベーターから降りるとルーサーは何事も無かったかのようにホテルのエントランスで待つ市長に微笑んだ。

市長はあらゆるコネを駆使してパーティーにディナーにとルーサー

を招待したが
何かと理由をつけて断られている。
ルーサー達は逃げ口上も尽きてしまい特権意識の強い市長の招待を受けて開催式に同席することになった。

開催式典はＶＩＰルームのバルコニーで参加し競技観戦の後市長の家族と共にホテルでのディナーが待っている。

ホテルの客が引きつけられる様にルーサーの歩みを見ている。

ルーサが立ち止まり市長と話し始めるとを夢を見るように客もボーイも見つめている。
「トーマスベルグ市長、今日は忙しいお体を私のために空けてくださって嬉しく思います。楽しみにしていたんですよ。いつも競技の有る週にレイステンに居たことがなくて」

握手を交わした手をエントランスのドアに向けて市長をそれとなくエスコートする。
ここで立ち話をしても何の実りもない。

満面笑みの市長は軽く背中を押されるまま雲の上を歩く。
「そうでしょう！そうでしょう！プリンスも若い青年の一人こんな面白い競技は滅多にない。老若男女全てが楽しめる我が都市が誇る娯楽です。今日はプリンスと同席して観賞できるなんて夢のようです。ああなんと美しいその微笑お写真や絵画では表現できない！あなたのご尊顔を・・」

ドアボーイに軽く会釈をしてテット等警備の人間が先の歩道で目線でＯＫを出す。

なかなか進まない市長の歩みをもう一度速めるために言葉をかける。
「そこまでですよ。スタート時間が迫っています」
わずかに頭を傾けて市長の言葉を遮る。

ルーサーの容姿を褒め讃える言葉は物心ついた頃から数限りなく聞いている。
誰でも人は例外なくルーサーに見惚れる。
絵画の中の人物のようだ神話の世界から光臨してきた神の一人だと言った人物も居た。

外見の見てくれなどたぶんルーサーの母親が隣に居れば賞賛の声の半分は母親に囁かれたと思う。
残念なのはルーサーを生んだ母親はルーサーを産むため力んだのが元で脳の中の血管が破裂してルーサーを一目見ることもなく亡くなってしまった事。
当時王の愛人だった母は死んでから妻という位は付いたが后の冠は貰えず逝った。

王の正式な后となればその嫡男はそのまま王の跡継ぎとみなされるが正式な后に子供が居ない場合公平な詮議が評議会によって行なわれる。

ガイネス王国は似非民衆主義と王権国家とを併用し王を選出す際、慣習によって后の嫡男を選ぶ場合と嫡男が居ない場合王の血筋を引く者、
系譜に載っている者の中から様ざまな試験を行い秀でた王を選ぶ。

この方法は王族間の血縁関係を強固にすると同時に
固執した一つの勢力を退け新しい風を吹き込む事で流れを活性化させる効果がある。

ガイネス王国を受け継いだ時王は将来自分の子供がこの椅子に座ることに疑いを持たなかった。
誰よりも賢く強靭な肉体の持ち主だったからだ。
美しい女性と恋をして子供を授かり後にはその女性を評議会で后に引き上げ順風満風の人生を思い描いていたのである。

ＶＩＰルーム

ロックイーゼンとは、
あらゆる競技・・・陸上競技、格闘技、武道、などの戦いのための技術、術に秀でた者、
並びに平和な時代に自己防衛や自己修練を積んだ人間なら誰もがこのフィールドで走る権利がある。

誰もが自分の得意分野で力を発揮すること勝利に貢献することが出来、
多種多様な競技の第一線で活躍し小さな故障で第一線を退いた者、
将来を有望視されていて才能があると認められていても大会に調子を合わせられず不調のまま沈んだ者などを救済するためにこの競技はある。と、役所や国に出した申請書には有る。
厳格な規律とスポーツをする醍醐味と感動を与えるという意義を振りかざして認可された。

実際には少ない掛け金で誰もが楽しんで出来る公共事業にして広く大勢の人間から金を集めるシステムがここに誕生した。

プレオープンはＴＶ放送は無いがこれからのロックイーゼンを占う前哨戦だ。
ファンならば是非とも見ておきたい最初の個人戦である。

全身タイツに包まれたスーツ姿の身体を消毒薬のにおいの残る選手控え室から三十メートル離れた、
車庫の出入り口のような傾斜のついた坂を上るとスタートライン。

選手が一同に並ぶとさらに天井やサイドの照明が明るくなる。
ラティーフは目を細めて辺りを眺めた。
始め入り口近くのライトの向こう側にたくさんの色の波が見え
そのうねりの一つ一つが人の顔でそれらが全て高台の出走口を見て
いると分かったのは一人ひとり選手の名前が読み上げられている中
盤。

そっとラティーフは選手の陰に隠れて前進し
左横の覗き窓からこれから駆けるアトラクションを見下ろした。
まばゆいライトの隙間に浮かび上がるのは波一つ立たない水面がギ
ラリと光って見える。

右に目を移すと手前の出走口から飛び出た後十五メートル真下の砂
地に落ちる。こっちが最初のルートだ。
砂地を五十メートル駆けると反り返った壁が見える。
一般人ならばその手前に反り返った壁を見たら唖然とし立ち尽くす
に違いない。
しかも背丈の三倍は軽くある。
その壁越しに空中に浮いたような円盤に飛びついて立てた丸太に太
いポリウレタンを巻きつけた振動棒がゆっくりと動いている。
その後は・・・と見えているものとコースを頭の中で組みあわせて
いるとスタートのサイレンが鳴り響いた。

市長を道路に残していきそうな勢いでルーサーは歩き闘技場に着く
と待ち構えていた係員と
コンコースからエレベーターで直接ＶＩＰ専用のラウンジを通過し
ＶＩＰルームにアルヴァー・ルーサーとトーマスベルグ市長は案内
された。

一般市民の目から隔離された一角には先客が居て飲み物を片手に談

笑をしている。

一人は市議会の議員であとの二人は大手企業の専務と親の金で会社を興して肩書きだけは社長の三人である。

「今入ってきたの・・見たか」好奇心旺盛の目が笑う。
褐色の髪の男が飲み物を口にして新しい入室者を観察している。
「ああ、市長が珍しく笑顔で入ってきた。それがどうした家族サービスだろう?」
この男は市長の顔は確認したが連れまで見なかった。

「今日はちょっと違うらしい。あれは・・プリンスを連れている」
親に会社運営の資金援助を頼みその資金も完済するぐらいの勢いの儲けがある男は事情通を気取った。
「プリンス?何処の?」
聞きなれない言葉に幾つかの有名な王権国家を思い出している。

「ガイネス王国だ。まぁ王位継承権はかなり下だろう。こんな所にいるくらいだから」
実はそのガイネスに工場を建てさせて品物を輸入し儲けている。
「ガイネス?あの頑固者ばかりが集まっている国だな。この時世にあいつ等とは肌が合わないな」
市議会の議員は国交を結ぼうとしないガイネス国として知っている。
「フン、美人だ」
男の目は市長の連れから離れない。
「美人?」
プリンスには興味は無いが美人には一言挨拶を交わしたい。
プレオープンをわざわざ観に来るご婦人方は少ない。
「男でも女でも美しいければ全て美人というのだ。絶世の美人だ。市長でなくても口が開いたままになる」

オペラグラスを持ったままの市長は口を開けて隣のルーサーを見つめている。
「今度の国の予算案ではガイネスの武器を買うことに可決されそうだ。ガイネスのほら何とかって将軍と」
企業の専務になった男は国家の買い物にアンテナを立てている。
「ああ有名な女の将軍か。確か・・プラテアド。北の海にプラテアド軍あり手を抜かないからな、少しは手加減って物を知ればいいのに事前に申請した船、航空機以外は領海侵犯として追い払われるらしい」
「最近じゃすぐにその映像を公開するからこっちのほうも文句が言えない。扱いにくい国だぜ」
と議員の男。
「失敗したのか?」
社長は思い当たることがあるらしい。

「何が?」
質問をした男がどんな情報を欲しがっているか考えて返事をする。

「カット財団が着手したプロジェクトだよ」
と社長の男。
審議の中心人物ではなかったがうまみのある話だと興味があった。
幾つもプロジェクトを立ち上げては横滑りに計画が売られていくのを何件も見ているが
横取りしたカット財団が自分の建設会社を総動員させて望んだだけにその結果に男は多少の溜飲がさがっている。

「カヤンデル山脈の地下資源開発か。荒地を五百メートル直下に掘って南に向かったが出てきたのは温泉だけ、暫らくその湧き出た水の勢いが収まるのを待ったがセイラー地区の湖の水量が減って湖の

底が陥没して坑道は埋まるし湖の水が無くなって地域住民がカット財団を相手取って訴訟を起こしている」
市議は終わった事だと簡単に情報を洩らした。

「地核は我々の方角に口を開けていたのか」
地質学者の意見を聞くまでも無いかと遠い目をする。
足元には宝は埋まっていないと確認しただけである。

「そういうこと。今朝のニュースにちょっとだけ扱われていたな。湖の底を元通りにすることとそれまでの住民の水を確保することを条件に和解したらしい」
「骨折り損か。本当にまだガイネスには希少金属があるのか？」
市場にガイネスが参入してくると厄介なことになると男は思う。
でもなぜ向こう側にあってこっちの麓には鉱脈が無いのかとまだ疑問に思っている。

「宝石の国ガイネスだ、カヤンデル山脈のどこかを掘れば少しは出てくるかもしれん。広大な未開拓地持って居る。うわさじゃ掘りつくして何もないって話になってる」と笑ってみせる。
その広大な土地にただ同然で工場を建てさせて安い賃金で働かせて儲けている。

掘るものがなければ地上を活用する。ガイネスの賃金はこちら側の市場の十分の一。
父親が買い付ける高額な武器の取引に乗じてガイネスで工場の新設を果たし
勤勉実直なガイネスの人間を使えば金儲けは容易い。

「おーーお、市長の鼻の下。伸びてる伸びてる」
このまま話し込めば自分の金儲けのマジックを話したくなる。

咽元まででかかった言葉を飲み込み話の矛先を変える。

「ここじゃ市長が一番偉いからな」

チラリと赤ら顔の市長を盗み見て嘲笑する。

市長の手元の飲み物だけで酔っているのでは無さそうだ。

隣の美青年は脂ぎった市長の顔で見えない、残念だ。

「お、始まった」

美しい色とりどりの人形が横長の口からあふれ出てふわりふわりと落ちていく。

「今年は・・・お、好み！あの娘残ってくれないかな」

砂を撒き散らして駆け始めるる真剣な表情の選手たち。

「だめだめ！今年のスターはロホの彼女だ！絶対だ！」

もう美しい女性選手を見つけて口元が緩む。

「お前の予想は外れっぱなしだからな。う～～、確かに良いプロポーションだな。どの競技から来てる？」

双眼鏡から目を外してＶＩＰ専用に配られたパンフレットを見る。

カラーで刷られた印刷物には配当の予想と大きなマルが幾つも書き込まれている。

「あれ？今回は個人名で賭けるのかか？やめとけやめとけって色で選んだほうが手堅いぞ」

この友人の予想は良く当たる。

隠れて個人予想で賭けることにしたこれは彼女へのご祝儀だ。

「そうなんだが・・男はどうする？」

女性の場合は好みで決めるが男は印象が薄くいつも髪形で決める。

「ううんと・・筋肉のつき方からだとアスルマリノの奴が一番良さそうだ」
躍動する素晴らしい肉体美の中から引き締まった無駄の無い柔軟な筋肉をみつけている。

「どれどれ・・まぁまぁかな」
言われて探し出してみたが他の選手との違いは男にはわからない。

フィールドに走り出した選手に勝手な妄想と夢を抱き何かに追われて高い壁や複雑な骨組みの中をカラフルな色が通り抜けていく。

「今年は選手の当たり年ですな。なかなかいい動きの新人が多い」
目の前を走りぬける選手よりも隣のルーサーから市長は一瞬も目が離れない。
「そのようですね」
市長から渡された無骨な黒い双眼鏡をルーサーは顔から離さずに答える。
空調で室内の温度は調整されているはずなのに
市長のシャツカラーは顔から流れ出た汗で濡れ
握りしめたパンフレットも滴り落ちた汗を吸収し
市長の席からは汗と香料が混じりあい嫌な臭いが漂い始めている。

プレオープン

色彩豊かな色の集団が触手を伸ばすように
灰色の壁の突起（ホールド）を掴み昇っている。

選手の足や腕がスライムの様に伸びては縮みぶつかり合い（実際にはぶつからないが観客にはそう見える）
一時も同じ模様にはならないが華やかで不思議な壁絵を作っている。

突き出た部分が五センチに満たないの握りを奪い合いたどり着いた頂上で
次に飛ぶ前のアネルにマイアーは声をかけた。
かけずには居られなかった。
「ありがとう、アネル、でもあなたベルデよ。いいの？」
と小声で。

マイアーは手を伸ばし掴もうとしたホールドを水色の選手に取られ
左手右足だけ引っ掛けて宙に浮いた。
あと少しで壁の頂上というところだったから
ここで落とされては砂地からのやり直しはかなりきつい。
マイアーはホールドを取られ悔しくて惨めな気分になった。

右足の小さなエッジから離れて落ちる・・と思った瞬間
マイアーのお腹付近にあるエッジにアネルが足を伸ばしマイアーの落下を防いだ。マイアーはアネルの足に右足を乗せ狙っていた上のホールドを掴み危機を脱した。

アネルは笑顔を見せて奇怪な人工的障害物までの距離を測りちらっとだけマイアーを見て

次のアトラクションへ急ぐ。

色の流れが坂道をボールの様に跳ね転がる。

ドンガと命名されたの壁をよじ登りまた急な下り・・今度はそのくだりを利用して小川を飛び越えて直立にたった岩肌に手足の指先だけ引っ掛けて昇る。

アネルとマイアー、二人は同時にそのアトラクションに取り掛かる。良いポジションをとろうと他の選手が次の岩に張り付き右へ左へと腕を伸ばしている。

「くっそーどけ！邪魔だ」紺色の巨体が器用に昇っていく。負けじとアネルマとマイアーが後を追う。

マイアーの上気した顔がアネルに微笑む。見晴らしの良い天辺では選手らが自分自身の息を整えながら作戦を立て、思い思いの場所でゆっくりと空中で動き回るアトラクションを見ている。

礼を言われたアネルは恥ずかしそうに笑いアマリジョ（黄）のマイアーを見る。

「だって平和は友情、助け合いは人間の基本・・でしょう?」

やっとマイアーに答える時間が出来た。

マイアーのありがとうの意味を込めた美しい微笑みを見ることなくアネルはポジション取りに動いた。

アネルが言った言葉はロックイーゼンの掲げるスローガンである。

岩肌を登り詰めるとくるくると回るコマが三個、地上十メートルの

位置で旋廻している。
「あれに飛び移るのね」隣に来たマイアーの言葉にうなずくアネル。付かず離れず二人はアトラクションをこなしてきた。
コマはモメンセ河の浮石を模している。

「助走をつけなきゃ飛び移れないぜ。邪魔だ！」
水色の男は次々と昇ってくる選手たちを睨む。威嚇もありだ。
数人の選手が目標を定めて飛び、コマの端に手をかけそこなって落下した。

落ちた先には土色の水が待っている。茶色の水しぶきが高く上がる。あの中に浸かると美しい色のフルボディスーツはその役目を果たさなくなる。

アネルも狭いコマの上に自分の場所を確保できるか一瞬考えたが旋廻してくるコマが目の前に来た途端跳躍してすぐにコマに飛び移っていた。
コマに足をつけると素早く反対側に回るとアネルと同じに潔く飛び移ってきた選手たちにぶつかるのを回避した。
コマはくるくると回り向こう岸近くまで来た。
次は半径二メートルの高いポール。さながら空中に浮かぶきのこだ。

数箇所取っ手のついた場所目掛けて飛び張り付くと取っての数だけ人数を感知するとポールはその場で回りだし選手を振り回し始める。
回り始めたきのこに振り落とされる選手が続出する。

「フォーィ、今度はあの網の中かよ。おらよっと」
と、黄色のウェアの男は軽々と空中に浮かび四本の支柱に張られた大きなネットの中に落ちていった。

「フンッ！」とアネルも真似して飛んだ。
網の上を器用にアネルは歩いて木で作られたピラミッド型のジャングルジムに入り込む。
ピラミッドの天辺に設置されたパネルにタッチして入り組んだ木をかいくぐり、

ハンマー海峡と名前をつけられたアトラクションに足を踏み入れる。
空中に十五センチ幅の橋が二本四十五メートルの長さで対岸に架かっている。
自分の体重と後からやってきた選手の揺らす振動を起用に利用して一歩一歩進み橋を渡り終えるとここからスピード勝負だ。
ジグザグに置かれたランプにタッチして落ちてくるハンマーの下を潜り抜ける。
ハンマーにたたき出されるとスタート地点の砂地に戻されるから大変だ。

ハンマー海峡の向こう側は当然海という設定で深いプールが待っている。
ここは高さがあり水に届くまで長いので耐空時間があり落下している間に回転やひねりを入れて個人技を競う。

プールの先には水中から気泡と一緒に大きな岩を模した突起が浮かび上がる。
岩と泡の水の障害物を乗り越えて海峡の高い岩壁を登り詰めるとラストランである。

見通しの良い平たい場所に高さ一メートル弱の障害物が五メートルおきに設置されて選手の行く手を阻む
地上を走るには全速力は出せないし障害物の上を飛ぶには目測を誤れば突起物の上に乗ってスピードがダウンする。

しかもここはだだっ広く他の選手の行動が全部視野に入るように作られている。

「ほうほう！今年の新人はいいのが揃ってる。そう思うだろうビル。よし明日の会議はランチと一緒にやろう。いいシーズンになるぜ！」軽くウインクをするオーケシュストにビルは笑顔で答える。

確かにスターを作るのはオーケシュストは長けているとビルは思うがあまりにシナリオを作りすぎて彼の押す選手はそこそこの人気しか得られない場合が過去には数多くある。
集中してこれ見よがしで画像を配信し名前を連呼してもファンの頭の中のストーリーは作れないし、
オーケシュストの推す選手の名前を覚えるのは年寄りと子供だけだろうとビルは思う。

会場の嬌声の中、ゴールラインに一番で飛び込んできたのはミルレンブラントこと ミリー。
じつにＴＶ映りの良い汗に濡れた顔で清清しい魅力溢れる笑顔が会場に設置された大画面で大きくクローズアップされる。

ミリーがゴールラインを踏むと赤外線で感知し天井から金色の紙ふぶきが舞い降りてくる。

隣に居るオーケシュストに気を使って、
「決勝戦じゃないんだぜ」と小声で言う。
オーケシュストの今年の新人戦への意気込みはわかるが
又アルバイトを雇ってあの紙ふぶきを回収しなければならないと思うと気が滅入る。

会議

レイステン市の新しい名所になりつつあるのが
競技場から五キロ離れた場所に総合スポーツ施設である。

大きなスポーツ大会競技に向けて集中して練習を行なうために
埋め立ての際オーケシュストが進言してトーマスベルグ市長に作らせたものだ。
陸上、水中、水上、空まで想定した巨大な設備を整えたスポーツ施設である。

各競技の選手たちは快適な宿舎が提供され
身体を整えるためと鍛えるための設備と事故を想定した医療設備を兼ね備えた場所で
心いくまで大会に向けて身体を最終調節できる施設である。

スポーツ選手の育成に力を注いでいるという健全な施設と、
一般スポーツと違い特別な要素を持った、国公認の・・賭け事の対象になっているロックイーゼンの競技者は一般施設利用者からは隔離されて生活している。

公共賭博であるロックイーゼン競技者に接触する
全ての人間、郵便物やファンレター、ファンからの贈り物
差し入れなどなど全てに厳重にチェックされ出入りする人間にも制約がかけられ

当然競技者からの一般人への連絡は監視対象のトップに位置づけられ、
建物は厳重なセキュリティに守られて、徹底した管理がロックイー

ゼンの競技を神格化させ人気を集める要因の一つになっている。

施設は道路沿いの高い塀に金網にまきついた蔦が
二重にも三重にも膨れ上がり長い緑が取り巻いている緑の壁が突然
切れ入り込んだ場所には
大きな巨木が左右に二本この施設の来訪者を迎える。
コンセプトは自然界との繋がり、を示し建物の正面には
神々しい威厳を表現して作られた金ぴかのエントランス。
自動ドアが開き一歩中に入ると真っ赤なカーペットが
樹木の幹と枝を表して各部屋へ赤く伸びているが二階から上が選手
達に与えられた居住空間である。

カメラ片手に門だけを撮影して帰るファンが後を絶たたず
ファンが門の前で長居すると大木の陰に有る守衛室から大きな身体
の警備員が
親切に選手の予定表を持ってファンの身上調査を始める。
他愛ない話から名前を聞き出し何度も通うようであれば
ピックアップされ要注意人物として名前が書き加えられる。
又宿舎から出てくるロックイーゼンの選手のペイントの無い顔を
カメラに収めたいファンや記者は駐車禁止の表示を気にしながら
周辺をぐるぐる回りシャッターチャンスを常に狙っていた。

三階から上は選手の個人用の部屋がある。
帰ってきたばかりのミリーは二階のラウンジは無視して部屋に入る
と同時に携帯電話を取り出した。
ソファに座り込むと同時に最初の呼び出し音が終わらず出た相手に
向かって微笑んだ。

「ハァイー愛しいハニィー私の成績聞きたくない？そうよ私は一番
で入ったのよ。最高に運が良かったわ。来月の本戦では今日の映像

が使われると思うから楽しみにしてね。映るわよなんたって一番よ！これで映さなきゃ私文句を言ってやるわよ。うっふっふっ愛しているわ、ハニィー」

言葉尻に甘ったるい含みをたっぷり乗せて言うと相手も嬉しそうに愛してるよと返答する。

手術の途中だと電話の相手にもっと褒めてもらいたい気持ちを押し込めてミリーは携帯を切る。

出だしはまぁまぁだわ及第点よ自信に満ちた笑顔を壁に張り付いた鏡で確かめる。

何処から見ても完璧な顔、元々目鼻口と変則の三角形の位置にある、それが彼の手で何倍も魅力的になった。

コンコンとミリーの部屋のドアをノックする者が居る。

「フロステルだ。ラウンジに行かないか」

大勢居た選手の中で最初にミリーにちょっかいをかけてきた男だ。

「いいわよ」

男友達は何人居てもかまわないと携帯電話を閉じて可愛く肩をすくめる。

情報はあればあるほど良いと彼に言われている。最初の個人情報収集は彼から始めることにした。

「うふん。おまたせ」

選手が住んでいるビルから離れて樹木に遮られた場所にロックイーゼンに関連する従業員並びにスポーツトレーナが住む建物がある。

一階部分は会議室、地下にはセキュリティシステム全ての情報が集められているシークレットルームがある。

地下の区割りされた部屋にはこの大きな施設の全容が映し出された

モニタールームが次の部屋には選手の使う携帯電話通信で使われる電波は
ここを経由して本来のラインに乗る。
集積回路に集められた音声はスーパーコンピューターで分析される。
たとえば言葉の中に暗号を隠して伝えると選手と会話をした相手は五年間ロックイーゼンの掛札を買うことが出来ない。

ナチュラルな物を好むオーケシュストが室内をデザインした豪華な応接間はもとい会議室は
たっぷりあるカーテンの生地を湿気を含んだ生暖かい風が吹き込み重たいカーテンを揺らしている。

さっきメイク係に決めてもらったヘァースタイルが風に負けてオーケシュストの頭の地肌を見せている。

一人掛けの椅子に座り足を組み替えて揃った顔ぶれを一巡する。
「で、昨日の保安部の報告は。皆ちゃんと規則を守っているかな？
ここん所は重要だからな市の要望は健全な遊技場だ。些細なことでも市には報告しとかなきゃな」

部門別に二十人がテーブルに付き古いメンバーはスミスとビルとオーケシュストだけである。

実直な元警官だという保安部の部長は砕けた感じのオーケシュストの態度を完全に無視している。
背もたれに背中に預けることもなく前のめりで
役所に出す予定の書類と同じものに目を通しながら報告をする。

古顔のスミスである。
「ええ、ではまず建物内で聞き取ったものを。選手同士の会話は他

愛もないものでした。通話は五十ニ件、今回の新人は通話回数は少ないようですね。相手のナンバーから割り出した職業と名前です。今のところマフィアがらみの人間は居ないようですね。気になる・・というか整形外科医が一人。患者が縁で付き合った可能性もなくは無いから、調べてみる必要がありそうです」
書類をオーケシュストのほうへ滑らせる。

保安部のスミスがコピーした資料にオーケシュストはざっと目を通すとオーケシュストの口元に下品な笑いが浮かぶ。
他人の秘密を覗き見る喜びを満面に出すオーナーに保安部長は沈んだ気持ちになる。
好き好んで他人の電話を盗聴しているわけではない。

オーケシュストの隣でちらりと笑い顔を見て不快な感情がわきあがってくるのをビルは押さえる。
「さっきのは注意事項に入れてもいいのかな」とスミスに尋ねる。

ビルの落ち着いた態度にスミスは気が弛む。大事な個人情報を面白半分で見られたくない。
「んー、私としては入れたいのですが、如何でしょうか?」
とスミスはオーケシュストの隣にいるビルに安堵の笑顔を向けたがその笑顔はオーケシュストがしっかり受け取って偉そうにそっくり返って答える。

「いいだろう!俺達が些細なことにも気を配っていると市長も思うだろう。まぁ清廉潔白な奴なんか居やしないって、誰だって一つや二つ叩けば埃が出るってものさ。なぁ」
と軽くスミスにウインク。

便宜上の報告だと高をくくっているオーケシュストに
保安部のスミスは自分の仕事がものすごく軽く見られていると感じる。

ロックイーゼンが始まって以来十年、毎年恒例の行事として市民には受け入れられている。
他の競技熟練者からも羨望のまなざしで見られているのは
徹底した不正の管理と支払われる多額の契約金とが保障されているからだ。

専門誌も多数出回り雑誌には必ず数ページは特集を組まれシーズンが始まれば紙面を賑わすのがロックイーゼンの選手たちである。
闘技場で行なわれるドラマチックな戦略と選手のひたむきな汗と涙が幾度も観客の感動を呼び起こしシーズンチケットは必ず完売している。
スミスは誇りを持って不正と戦っているつもりだが
オーナーであるオーケシュストは体裁さえ整えばＯＫという雰囲気で本当に役所との規約を念頭に仕事をしているのだろうかと疑問に思うことがしばしば有る。

ロックイーゼンの知名度が上がるたび土地の所有者である市と
認可した国、もちろん発案者でもあり主催者でもあるオーケシュスト等の懐は潤うが、
洗練された個人技とチームの団結力を前面に押し出し清廉潔白なイメージが売り物なのに
現実はゲームをコントロールして大金を手に入れようともがいている人間が後を立たない。

体育館

いつもは体操競技で使われるフロアがロックイーゼンの選手で埋め尽くされている。
初日、競技を終えた選手には中堅の選手やトレーナーがついて各アトラクションの攻略方法である身体の使い方をレクチャーしている最中。

「まず最初、スタート直後の砂地の走り方だが無駄に力を使いすぎる。新人は皆そうだがあの曲面を登るために加速したい気持ちは良くわかるが。砂地を大またで走れば腰に負担がかかりすぎるしスピードも思ったより出ない。ならどうした良いか。カスティル」
とジリアスク。
マットレスに座っているのは三人、後の六人は専用の折りたたみ椅子に腰をかけている。
「足腰を鍛える」
屈託ない笑顔がジリアスクに向けられる。

苦笑しながらジリアスクは目のきらきら光る可愛いミリーに移した。
「そうだ。それも正解だ。君はどう思う?」

可愛さ全開のミリーは自分の存在が充分にジリアスクに伝わったのを確認して答える。
「あたし?あたしならいつもの歩幅より小さくするわ。ピッチを上げて駆け抜けるわ」

今年の新人は俺等の時と違うなと自信に満ちた目で見上げるミリーの魅力的な笑顔に見とれる。
「よし。いいぞ!いいか背骨の軸を意識して太ももを上げるように

して走れ。蹴幅を変えると左右にぶれたりスピードが弛んだりと良いことは無い」

「それから次が意外と時間を食った場所だったな。ここでのロスタイムは個人戦では後の巻き返しも可能だろうが団体戦ともなるとちょっと辛い、二度も三度も駆け上ると団体戦では全員が揃わないといけないプログラムがある。君たちは優秀だから身体の使い方を見れば自分で方法を会得できるだろう。出来ないやつは個人的に俺かポールに言ってきてくれ。完璧に教えるから。じゃポール見本を頼む」

選手たちよりはるかに体重の軽そうな背の低いトレーナーが短い助走で壁を登り張り出した窓枠にぶら下がりマットレスの上に着地した。

その場全員の目がその程度の動きは子供にでもできると自信に満ち溢れた表情で見つめている。

新人レースが終り最初の段階で色分けされていた選手達が更にタイムで順位をつけられてチームの中でも三つに分けられた。

運動能力は拮抗していて分けた三チームに大きな違いはないと総監督は言うが歴然と三チームの差はあり優勝するチームは少し分析すれば予想が出来る。
長く活躍しているの選手ほどシーズンのシナリオを読み苦笑いしシーズン終りにある契約更新に上乗せが出来るようアピールできる自分の活躍場面多くすることを思い描き行動に移させた。
これは観客を喜ばせるショーである。

「悪いな呼び出して」
全力を出し切って疲れた頭で硬質ガラス越しの木々を見ていると
身奇麗にしたジリアスクがラティーフの前のいすに腰を落とした。

「チームとしてはいい結果を出したな。まずまずの成果だ」
「その・・単刀直入に言おうミリーの事はどう思う?あ、答えなくても解ってる君の日頃の態度を見れば
仲間として申し分ないと俺は思う。だがなもっとそのミリーを盛り立ててくれないか。彼女はベルデのスターだし見せ場を作って欲しいんだが。たとえばだが彼女の得意な場面では補助としてそばに寄らないで見守るとか。カメラの角度を考えてミリーが崖から落ちる時は他のチームの選手をさりげなく移動させるとか。君にならできるだろう?」

ジリアスクの言わんとしていることは解るが競技中にはかなり無理がある。
「補助が必要ないなら・・そうですね離れた所から移動します。崖の上では他の選手を押しのけることは不可能に近いと思いますが」
補助をしてくれと言ったのはミリーからであってラティーフが進んでやろうと言ったわけではない。

「そうだよな。これは例えだよ。君は目が良いからカメラの赤い作動ランプが見えるだろう。そのときは出来るだけ彼女をカメラの前にやって君は映らないように心がけてくれればいいんだ。チーム一丸となってミリーを押して行こうと思ってる」
晴れやかに言うジリアスクに無理に作った笑顔で答えるというだけの事は言ったとばかりに颯爽と立ち上がった。
「明日又体育館で動きをやってみよう」
と去っていった。

いつも全員集まる時には細かいことは気にするな全力で行こうとだけしか言わないのに
終わった後はちくちくとメンバーを呼び出しては個人的な動きを注意する
それがリーダの役目だと思っている。

競技が始まるとロックイーゼンを理解していない新人とそろそろなんとなく胡散臭さを感じてきているがまだ勝負にこだわっている中堅の選手達とが
熾烈なトップ争いをフィールドで行ない、アネルはオーケシュストの思惑通り人の良い性格のままリーダーの指示通りに動いている。

ある日希望する者だけが集まった体育館では見本演技をするラティーフの周りに人だかりがある。

「アネルもう少し解るように教えて」
そういって食い下がるのはダンジェルマイア。
プレオープンからアネルの動きが気になってしょうがないマイアーは試合が終わるたびアネルを通路で呼び止めてはアネルの解説に耳を傾けた。

最初何を聞かれているかわからなかったアネルも
素直なマイアーの問いに答えられるようになり言葉で解らないものは実際に動いてみせ、向上心の強いマイアーは貪欲にアネルの動きを少しずつ会得し
ロックイーゼンの見せ場を作るため自分の運動能力の限界に挑戦していた。

美の女神のようなマイアーが食いるように見つめる。
その真摯な姿に皆見惚れている。

「落ちる時には砂地に向かって足を踏み出すの」
もちろん身体は引力に負けて何もせずとも砂地に引き寄せられるが。
「イメージは壁を歩く・・かしら」
通常の一般的な運動能力の持ち主は想像はできても
無理があると解るがアネルはそれを瞬時にやっているから誰も異論は唱えない。

「真ん中ぐらいでひねりを入れて、壁を蹴って着地・・逆だわ壁を蹴ってすぐにひねりを入れるの」
自分の動きを言葉にして解説するのは難しい。

「地上では無理かもしれないけど。見ててくれるやってみるわ」
マイアーが集まっていた選手達の間をすり抜けて広い床の端に立ちダッと十メートル走りタンブリングをして空中高く舞い上がり着地した。
「う～～ん今のはサルトパスだな（ひねりを入れない）マイアーが望んでいるのはツイストパスだろう」
「俺は床の上ではやれると思うけど、落下している途中ではそれも真ん中まで来てやるのはちょっと無謀過ぎやしないか？」
リドイは誰よりも目立ちたいのでアネルと違う回転を入れた降り方をする。

アネルに見えるようにマイアーは左の端から又走りタンブリングにひねりを入れる。
マイアーは大技よりも小気味良い切れ味のシャープなひねりを入れた着地を好んでいる。

これはマイアーだけが気がついたことでは無いが壁を走り中間で蹴りを入れることによって
着地が早くなりしかもひねった勢いで両足着地ではなく片足が下りた時点で
もうすでに走り出しているというマイアーに言わせると完璧な形なのである。

「今のでいいけど、出来ればせっかくのひねりを入れた勢いをそのまま使うために、回転軸を足に持ってきて身体が倒れこむようにしてみて。自然とどちらかの足が前に出るはずだから」
五十人近い選手達が見守る中晴れやかな笑顔がアネルに向けられるが笑顔はすぐに遮断されてマイアーに魅せられた男女がピンク色の言葉を口にする。

「綺麗に決まったね。でもさもう少し体の力を抜かないといけないね。これって結構身体に負担がかかる。後で疲れるの嫌だろう。だからさこの場合・・」
熱心な目がマイアーだけを見つめる。

「いいねいい動きだよ。天から降りてきた女神みたいだよ」
と賛辞の声。

「最高だね。出来ればもう少し腰を落とせばパーフェクトだ」
満面の笑顔でマイアーを見つめる。
「次にあたしが見てもらおうと思っているけど、先に完璧な演技みせられるとやりづらいわ」
とミリーマキ。
「そんなことないわ。私ちゃんと出来たなんて思ってないわ。アネ

ルにまだ聞きたいことがあるの退いてくださる？」
三重になった円の中心がラティーフに向かってが動く。

忍耐強くマイアーの崇拝者に邪険に扱われても
この場は怒り出すことも逃げ出すことも出来ない、
マイアーの顔が見える位置または声が聞えるまで彼女が近づいてくるのを辛抱強くアネルは待つ。

鉄女　バラディール将軍

モラド半島の気候は暑さ寒さの気温の差はあるが
一年間の雨量は少なくカヤンデルの麓以外は広い半島全土が乾燥した荒地と化したままだ。

バラデュールは窓の外に広がる薄茶色の砂漠を見ている。
モラド半島にプラテアド軍が本拠地を構えて百年を過ぎるというのに目の前の大地は緑に潤ったことが無い。
カヤンデル山脈の恩恵は視界の範囲にはないけれど
乾燥した土地が宝を吐き出し希少金属の鉱脈にもなっているのは皮肉だ。

山側の傾斜地から引いた水路に添って土地の色と同じ屋根を持った工場が
砂漠と同化して地平線の向こうまで並んでいる。

ガイネスの歴史は西のプラテアド半島から始まった。
山肌に露出していた宝石の原石を研磨して北の港で売買したのが始まりだ。

船は他国の珍しい品々を積みこぞってガイネスの美しい腕輪や首飾りなどの宝飾品を求めてきた。
宝石の国ガイネスとして諸国に知られるとその宝石を独り占めしようと幾たびか他国の軍隊が送られてきた。

モラドが武器を生産するようになったのはプラテアド半島から上陸した侵略者に虐殺された事から始まった。
貧弱な武器しか持たないプラテアドの一族は港を離れ

カヤンデルの山脈の奥地から隣のドラドへ逃げ
ドラドの一族やブランコの一族に助けを求めプラテアドを何度も奪還した歴史にある。

惨殺された記憶はガイネスを内に閉じこもらせ他国との国交を禁じ、近代化する諸国を尻目にガイネス独自の政治や文化を今日まで推し進めてきている。

一切外部の情報は国民には入れず一部の者だけが諸国に目を光らせて監視し
近代化の流れを読んでは対処してきたがそれも限界が来ている。
時の流れはガイネス一の都だったプラテアドを以前の住民の三分の二にし
半島に残ったのは港を守る僅かな兵士と漁民が住む街に変わっていった。

近代になると産業はモラドへ移行して誰もプラテアドに見向きもしなかったが、
外貨を稼ぐためにもプラテアド一族の一人サガモアが審議にかけ
朽ち果てた都に手を入れてホテルとして整備し観光事業を始め、
当初は諸国の王侯貴族だけに限って上陸を許していたが
儲かると解ると外洋船や大型クルーズ船の寄港を許可するとサガモアの懐は多いに潤っている。

新しい情報はプラテアド港に航海して来る観光船からも齎される。
情報は口から口へ瞬く間に広がり違った方向性を持つ。
それを修正するために何度も会議は行なわれ近代化した情報機器をガイネスにも取り入れもした。
国民の要求に役職の決め方も公開されたが国民がその役職につくことは難しく

冨のある者だけが出題される問題を解くことができ、たとえ民が試験を高得点で通過しても適正試験で一般民は落とされる仕組みがきちんと用意されてもいる。

それが国民の不満でもある。要職は古くから支配してきた七つの部族間でだけで回っているに過ぎない。
インターネット情報の中では海の向こうの国々の人々は王制に反対するデモや軍国主義に対する怒りが爆発してクーデターなどが勃発している事をガイネスの民も同時期に知る事が出来る。

これまではガイネス国民はは統制の取れた発信源を信じストライキ一つ反旗一つ翻ったことが無い。
選別された電気機器はガイネス中に設置されたが国民には不評だ。

外貨獲得のために始めた観光船事業はひなびた港を三百年前と同じく活気ある風景に戻したが
そこで働くガイネス国民は世界情勢を知るたびに複雑な思いに駆られる。
水力発電で出来た電気は一番端のモラド半島に届けられプラテアド軍の兵器の為に使われる。
一般家庭に電力は使われず天然ガスだけがかろうじてきている。

ネット画面で見る他国の街並みは明るく美しく一方ガイネスは街灯はガス燈のみ
夜仕事もガス燈の明かりの下で行なうから
部屋の一角だけが明るく町全体が明るくなることは無い。
それがよいと観光客はこぞって寄港許可を申請しているのは皮肉という他ない。

百年の間に工廠は産業になり精密機械となった兵器を敵国に売りつ

けるまでに成長し、
国を挙げて兵器を作り上げ衛星を打ち上げて
世界中を監視下においていることなどガイネス国民は知らない。
国家間では内密に兵器の売買が横行して各国のバイヤー達は増え続け百ヵ国を越えた。

若干十八歳のバラディールを軍隊に引き入れたのはシャルボニエ将軍で
将軍が引退したのがきっかけでバラディールはプラテアド軍の将軍としてトップの位置に就いた。

齢五十四歳の今日まで鉄女将軍と影口を叩かれながらその采配にどの一族の長も一目を置く。
鉄女将軍が一番信頼しているのはサガモア王で若いバラディールの突飛な行動を
他の一族が非難する中、必ず言葉を尽くしてバラディールを援護した。
そのサガモア王も指針を何処に置けばよいか混迷している。

農地も放牧する家畜も無いモラド半島の人間には軍人になる以外出世の道は開かれては居なかったが
僅かな期間でガイネス一の金持ちになりその構図を作ったのはバラディール自身である。
膨れ上がったバイヤー達を前に緻密な情報を腹に仕込み
恐れおののかせて交渉の場に立ち会ってもいる。

成金となり七部族を牛耳ってはいるものの国民からの信頼度は無い。
国民は世界にも例を見ない馴れ合いの試験制度の王族を軽視し国民が決める民主主義を望み始めその声がバラディールにも届いている。

国を守るという正義感の塊であるバラディールは突っ走ってきた人生を振り返り憂いて居る。

ポスター

近代的な開閉式の屋根を持つ円形闘技場は厳めしい外見に似合わず
一歩中に入れば豪華な広いエントランスが来訪者を迎える。
競技場へは中央の二股に分かれて上に伸びる大階段を上れば
人工的に作られた岩肌を模した壁と配置された植物によって
鬱蒼と草木の茂ったジャングルを連想させる通路に出る。

空調で足元から風を起こし木の葉がゆれると気分は
一万年も昔に闊歩した原人の気分をここで訪れた者に味あわせる。

しかし競技は先週に終り競技場は屋根裏バルコニーの見学通路を行
き来するのみである。
したがって観光で立ち寄ったファンは豪華なエントランスに設けら
れたグッズ売り場と各チームに色分けされた選手のパネルを見学し
設置された椅子に座り
週末に行なわれた競技の点数表が電光掲示板で流れる
横の大画面の中で跳躍する選手の必死の形相を羨望のまなざしで見
ている。
ベルデのミリーのアップの次にはアマリジョのマイアー、ロサのレ
フティーと人気者が次々と出てきては変わる。
来シーズン活躍する選手をファンは賭けシートを片手に次の予想を
練るのも楽しい作業である。

閉館時間が近づくと大勢居たファンの数も減り始め、
入り口横で待機していた警備員は変な忘れ物がないか順路に添って
歩き、
中央階段横の透明なアクリルボックスの前で一人身なりの良い青年
に気がついた。

警備員は熱心にポスターを見ている青年に声をかけた。
「毎年恒例の行事だ。せっかくだから好きな選手の箱の中にそこの用紙に住所と名前を書いて入れておくといい。確率は低いが最終日まで夢は見れる」
元気を出しなさいと一言警備員は付け加えたかったが余計なお世話だと自分に言い聞かせた。
青年が暗く落ち込んでいるように見えたのは消え始めた照明のせいかもしれない。

最後の締めくくりの催し、
ロックイーゼンファン投票で選ばれた二十人がチームカラーのペイントの顔で
笑っているポスターの前でルーサーは足を止めた。
壁一杯にロックイーゼンの選手がポスターの中で真剣な表情でこちらを見ている。
大画面ではカラフルなフルボディスーツが流れるように水の中に沈み崖を登る。
最初初めて競技を見た時その間中ルーサーの胸は早鐘のように打ち、
一人の選手だけを見つめていた。
興味は憧れに変わり二年後には熱狂的なファンの一人になっている。

ルーサーはついさっきレイステンについたばかりだ。
トランクを部屋に放り込み窓下に見える競技場にふらふらやってきている。

フラフラの理由は先月の議会で評議会が又延期された事。
これで次年の議会まで待たされ、
議会で選考会は必要無しと判断されれば又先延ばしされる可能性も出てきた。

ゴールの見えない試験勉強がずっと続くと思うと憂鬱になってくる。

ガイネス国で生れ落ちセデル国で教育を受けているルーサーは
物心ついた時から知識を詰め込みに西に東にと高名な教授に指示を仰ぎ
このままどこかの大学院で研究に勤しみたいと思ったことも二度や三度ではない。

ガイネスに帰るという思いを断ち切ることはルーサーについてきた侍従の希望をも断ち切ってしまう事になる。
侍従は家族を残してガイネスを出、二十数年一度たりともガイネスの土を踏まず、
彼らの役目であるルーサーを一人前にして立派な皇太子候補に仕立て上げることに邁進してきた。

できればルーサーとて皇太子になって彼らの地位を上げ一族全てに恩恵与えたい。
侍従一族といってもとうの昔に本流から外れて何の役職も与えられていないので、
ここで奮起すれば系譜にもぐりこめ将来自分達を踏み台にして一族の名人間を他に知らしめる才能が現われる。
皇太子を選抜する評議会が後回しにされている理由は世界の国々とガイネス国のギャップ。
ガイネス国民は世界に目を向けだし様ざまなことを限られた映像の中で知っている。

知りたいという欲望は日に日に増して
書物から得た知識よりも実際に現物で見る知識の違いに驚愕している時期はとっくに通り過ぎている。
一部の者だけが特権として外遊している事実が国民にも知れ渡り

ガイネスの王族の信用度は年々低くなる一方である。

一時は世界に類を見ない試験制度で優秀な人物を選出し
地位を与えているのだという説明で理解を得たが長年続く七つの部
族間だけの試験制度など
馴れ合いと暗黙の了解の中、試験の結果も公表されず
国民の知らないところで役職の授与式も終わることなどから不信感
の芽は摘み取れない。
統制の取れていた七つの部族間の間にも貧富の差が歴然と出始め
力の無い部族の代表は国の行事ですら決まった日にちを主張できず
裕福な部族の言いなりになっている。

そのとばっちりがルーサーがガイネスに帰れない理由だ。
侍従の心配顔が目の前のポスターに代わると不思議と心が落ち着き
勇気が胸の底から湧き上がってくる。
落胆した気持ちを奮い立たせてくれているのは実際には会ったこと
も無いスター選手。
ペイントが大量に塗られた顔にありがとうといって警備員に追い立
てられている人混みと一緒に闘技場をルーサーは出ていった。

フォークステット

ホテルの最上階ではテットがクリスを捕まえて怒りをぶつけている。

「又キャンセルだ！これで何度目だ。好きな学問だけは寝ないでもやるくせに、やらなきゃいけないことはここ二年間、一切やってない！一体どうなってやがる！歳をとればとるほど馬鹿になってやがるぜ！」

積み上がったトランクを前にして腕組をしたままテットは突っ立っている。

「反抗期なんだよ」

小さなトランクをクローゼットに運びながら苦笑してクリスは答える。

「今頃か！今が思春期か！」

と吐き捨てるようにテット。

クリスは一番大きなトランクを前に中身を空けるかちょっと悩む。止めて置こう。中身はルーサーの嫌い服ばかりである。

「彼は良くやってきたよ。僕等の言うことは全部こなしてきたじゃないか。そうだな、原因は評議会が延びたせいだろう。テットだって評議会が延びていなければそんなに腹が立たないだろう」

期待が大きかっただけに評議会が開かれないこはがっかりした。

クリスもこればっかりはどうすることも出来ない。

国を出たときは二十歳になったばかりのテットを筆頭に全員十代の

若者だった。
あのまま国に居れば船大工として登録し上級試験を経て処遇の良い地位を得ようとクリスは勉学に励んでいたと思われる。
思い詰めた表情のテットの父親から話を切り出されて、道場に通っていた皆の人生は大きく変わった。
プラテアド一族の外戚であると父親はテットに明かし嘘のような任務をテットに頼み込んだ。
師範代になったばかりのテットは突然降って湧いたような話しに胸躍らせ道場の若者を引きつれ見たことの無い他国へ旅立ったのである。
絶対無二の使命はサガモア王の子供の命を守ること。

テットの祖先のように一旦系譜から外れた人間が
本家に戻るのは難しいが今世紀は才能と実力が物を言い、
ルーサーと共にガイネスを後にした男達の願いは未来永劫にまで約束される地位にある。
ガイネス国に戻りたいという気持ちはあるがテット違いクリスはプラテアドの一族とは何の係わり合いも無い。
ガイネスの一般民は百年前の手工芸の世界が続いているセデル国では少数になった徒弟制度も当たり前である。

そもそも娯楽と呼べる施設は無い。
世界中衛星で会話し航空機で行き来し隣国が近く感じられる近代国家だというのに
ガイネスの通信網は百年前と同レベル。
近代通信機器や航空機は軍隊のみが使用し、
民間人の移動は最近になって復旧した電気自転車だというお粗末さ。
石工が石を切り出し木の枠組みで建造物が出来上がる。
生活に電子機器が不可欠なセデルと電子機器をまったく信用していないガイアス国民には

百年の文明の開きは酷すぎる。
クリスも車の免許を取り車体の整備も免許を取得しセデル国に放られても食っていくだけの技術は身につけたがこれはガイネスでは役に立たない。ガイネスは車社会ではなく自転車社会なのである。故郷に帰りたくもあれば帰りたくもない、故郷で育った年数よりも他国で過ごした年数が上回って離れすぎた故郷を思い出す日々は確実に減っている。

小脇に抱えた手帳を指で弾き口を結んで怒りを示す。
「そうかもしれん。だがな最後の詰めはしっかりとしていなくてならん。最後で投げるとは言語道断やるべきことはまだあるのだぞ」
母親のように接するクリスが悪いとばかりに顔を睨みつける。甘やかせやがってと顔で言う。

サガモア王は王に就任した日に二十二年後に評議会を開くと満場一致で決めている。
各部族それを目標に幼子の優劣を見極めこの子ならと教育をし育てていたのに裕福な部族の子供がその知識を身につけていないのか、身につけていても年齢が達していないのかは定かではないが有無を言わせずに来年に持ち越されている。
ガイネス国を出てから暮らしが蘇って来ては消える国の未来を荷うためといわれてきたが、その未来が本当にやってくるのかガイネス以外の国々は国民が決起し国を変えようとしているそれを目前に見ていると小さな個人の努力で知識を詰め込んだとて国を動かす力など到底出来ない。

テットの怒りなど慣れたものだ。いつもテットはルーサーの居ない所では愚痴っている。
「教授の評価が悪かったのか？何処か身体の調子でも悪かったかな。俺達は男所帯だ少しはルーサーに気を使わなきゃ彼は繊細なんだ」

優しいクリスは待ちぼうけを喰らったルーサーが可哀相でならない。

不満顔のテットは、宥めようとするクリスに反抗的な視線を送る。
「この俺と手合わせして三回に一回お情けをかけて勝負を譲る奴など繊細な気持ちなど無いわい」
週に三回、運動もかねて道場に通うが師範のテットの腕前はさび付いたのか
成人したかルーサーに勝てなくなった。

「プッ、全敗か。テットも歳だな。わりいわりい本気じゃない！一度他流試合を申し込んでみないか俺達も鍛えないとまずいだろう。
そうだなレイステンには何箇所か良い道場がある今夜辺り行こうや、あ、女はダメだぜこっちの女は鍛えるって事を知らない腑抜けでふにゃふにゃだ早くガイネスの女に会いてェ」
女の話が出るとテットは怒りが半分に減る。
当に嫁を貰う年齢は過ぎている。

「人通りが少ないと思ったら今日はやってないんだな」
公園にはロックイーゼン関連のグッズを売る露天が少ない。

「何を？」
怖い顔のテットは下界の事には関心が無い。

「ほんとにテットよ、遊びの一つでも覚えて帰ったほうがいいぞ。
そんな顔していると女にもてないぜ」
「ルーサーのように目の色を変えろってか？出来るか！」
吐き捨てるように言うテットにクリスは笑いをこらえた。
テットが女性歌手やモデルに夢中になっている姿は想像できない。
なのでいつか・・今夜にでもテットのファイル置き場に美しい女性が満載の雑誌を置いて観察してみるのも面白い。

「お前、ガキのようなことをしたらただじゃ置かないからな。あの闘技場に放り込んでやる」
テットはクリスが何を考えたの想像がついたらしい。

「え、なんで俺があの競技場のことを考えたのか解ったんだ?すごいよなこの国は何処へ行ってもロックイーゼンの話をすれば友達になれる。俺らの国にも競技場が一個は欲しいよな」
と誤魔化す。
テットは無駄に勘が鋭い。

実際にロックイーゼンと言う競技が国にあればと思う
世間からは軍事大国との評があるガイネスは軍備に関してはまったく諸国と引けはとらない。
というのも国民のから搾り取った税金を全て軍備に当てている現実がある。
ガイネス民は大虐殺の記憶を忘れずガイネスに生まれたからには自分の身は自分で守り小さな力でも二つ以上ならば兵士一人分の働きをする・・がスローガンで
歩き始めた赤ん坊から来るべき日を想定して身体を鍛えるのである。
一年の半分は働き後の半分はスポーツにかこつけて軍事訓練を行なうのがガイネス流だ。
武道は必須、幼い子供達が集められた保育機関では敵の襲撃にたしての行動規範が叩き込まれる。
幼い子供にまで隊列を組み移動する習慣を教え込むガイネスは異常だと思うが歴史から学び教訓とし実践して続いているのはよいことだとクリスは思う。

レイステン市の通りを歩く若者見るたび
クリスが彼らを頼りないと感じるのはガイネス国の実情を知ってい

るからである。

それに絶対の自信を持ってガイネスの国民のほうが運動能力が勝っているしもっと面白い盛り上がりるレースが楽しめるのではと思ってしまう。

ミリーの企み

ダンジェルマイアはおっとりして勝気な性格だが、失敗したことは教訓としてしっかりと分析し同じ轍を踏まないよう回避する努力も惜しまない。

試合が終わればＴＶに放送されなかった映像を呼び出し繰り返し気になる動きチェックする。
特に気に入っているのはのアネルの映像。
マイアーの理想とする身体の使い方がそこにある。
状況に応じて走り飛び跳ねる。気負いもなく当然のように着地し優雅にしなやかに目標物に到着する。
障害物との間には見えない空気の層が一定の距離で保たれる。

ミーティングルームのフロアーには席を一つ開けてミルレンブランドが座っている。
ミリーも研究熱心だとチラリと見えた映像を見てマイアーは思う。

が、ミリーが熱心に見ているのは同じ映像でも個々の選手のくせ。
ジルは踏み切りのときに腕が開くこれは使えそうだ。
ミリーマキは大柄な割には小回りが利くがその身体の大きさを使い切れていないように見える・・他の選手との接触を嫌っているのかも・・それって使える？
ラッシは落下の時に大げさに手を回しすぎる。たぶんこれはＴＶを意識してのこと。
ラッシと同じに飛ぶとミリーへ注目度は低いかも、いや使える。考えを変えればいい。彼のそばで無駄に動かずに居れば勝手にカメラが激しい動きの選手を写す。ＯＫ。
映像を見ながらカメラの位置を調べるのが目的だったが今では仲間

を自分のために利用できないか研究中である。

食事が終わると皆選手はお気に入りのトレーナの元へ行ったり好きな相手とラウンジでおしゃべりを楽しんだりと自由な時間を過ごす。

ラティーフは日頃から優しい言葉をかけてくれるスティーブと他の選手も交えて他愛も無い話の中に居る。

話題は地方の選手の生活と都市部のギャップ。

「雲が下に見えるって？信じられないよ四日もかかるのかい君の故郷には」

「違うわバッファローまでよ。またそこから歩くの。そんなに驚かなくてもいいわあなたをそこへ連れて行こうなんて思わないから。もう帰らないのよ誰も居ないの。皆居なくなったのよ」

みなの驚きにラティーフはびびる、特にスティーブは驚いている。

「そうかそうだよね山暮らしは不便だものな」

と、暮らしたことは無いが言ってみる。

「そんな高地でトレーニングできたらいいだろうな」

高地トレーニングは筋肉も含めて感覚の全てを研ぎ澄ましてくれそうだ。

「五千メートルクラスの山の上だぜ。きついだろう。酸素が五分の一か？倒れるなこりゃ」

行った事も無い山を想像している。

雑誌を読んでいたマイリーが笑う。

「あのな酸素濃度は標高五千では半分かな。違うのは気圧。酸素の摂取量で高山病になるんだ」

スティーブが聞く。
「アネルはならないんだろう?」
そんなところに住んでいたのなら高山病などなるわけが無い。
「解らないわそれって下りてもなるの?」
山を離れて数年経つ今は心も身体も街に慣れ親しんでいると感じている。

誰にでもウィンクするコーヌがアネルとスティーブにもウィンクしてちょっかいをかける。
「高地で育ってるって事は順応してることだからアネルはまったく問題ないね」
アネルも笑顔で答える。

コーヌのウィンクにやきもちを焼いたヴィセンヌが
大きな声でコーヌのファッションセンスにいちゃもんをつけて騒ぎ始めると、
かねてから考えていた言葉を小声でアネルはスティーブに囁いた。

「ね、今週末最後のプラネタリウムに行かない?」

プラネタリウムは友達同士で行くのも良いがカップルで行くともっと親密になれる。

「あ、いいよ」
一拍置いてよい返事が返ってきた。

その小さな間が気になる。

「誰かと行く予定があった?」

振られるのは早いほうが良い。

「無いよ」

即答での返事ににっこりと笑うアネル。

「それじゃ待ち合わせ場所は星の王子様で」

プラネタリウムの前の彫像である。

「楽しみだね」と、スティーブ。

「ええ」

嬉しくなってアネルが答えるとアネルの笑顔に気がついたリーフがやっかんで口を挟んできた。

「楽しそうな相談だね。で、どんな計画？休みにどこかのチームと合流して特訓をするんだろう？僕もその話聞いたんだ乗っけてくれよ」

ずっと気になっていたからひそひそ話しは皆この話題だと思っている。

「おい、そんな計画何処で立ち上がったんだ？」

とコーヌ。

「この間話が出たんだ。スパでゆっくりしようかって、そうしたら話しが進んじゃって候補がロッククライマーの聖地バルローとか厳しい場所ばかり皆言うからまとまらなくてさ。決まった訳じゃないのさ」

とマイリー。

「決まったら連絡入れてくれ。あっと話が流れても連絡をくれ。頼むぜ」とリーフ。

話の関係者を見つけて一安心する。

ミーティングルームの前ではミリーが通りがかりのアレックスに声をかけられている。
アレックスは口数は少ないが芯のしっかりした女性である。

「ミリー、あなたに一言言っておきたいことがあるの」

「ハァイ。どうしたの」
いつも笑顔が少ないわねと微笑んでみせる。

「マークにちょっかい出すのは止めてね。迷惑だから、彼が自分の口で言えないから私が変わりに言うわ」
アレックスはミリーが自分の魅力を振りまいてあっちこっちと選手の気持ちを乱しているのを知っている。

「アラ、あなた達公認なんですもの心配はいらないわ」
それにマークになんて興味ないの・・とまでは言わない本命はあなたよアレックス、あなたの心をかき乱したいの・・とにっこり笑う。

一見冷静沈着に見えるアレックスを精神的に追いつめるにはからめ手が必要とばかりにみんなの前でマークに近寄っている。
マークとミリーの仲の良い光景が何度か見かけられると噂が立つ、そこがミリーの狙い目。
これで来シーズンフィールドに出たときアレックスの見ている前で小声でマークに話しかければＯＫ。

「外の彼氏が居るんでしょう。寂しいのは解るけど皆の迷惑も考えてね」

ミリーが原因で喧嘩別れしたカップルの噂を聞いている。

「別れたの」

としんみりしてミリーは言う。

ミリーと整形外科医の関係は続いているが表向きは別れた事になっている。観察委員会からのイエローカードが彼に送られてきた、（赤いカードは家宅捜査が入る）それも想定内の計画。

ミリーの意外な返事に表情を少し和らげ同情心を示してアレックスは去った。

整形外科医の通帳残高がどれだけ増えたかミリーにはわからないが彼の計画通りに進んでいるから相当な大金を二人は手に入れている。

ダンジェルマイア

「どうしたの元気がないわね」
マイアーがタンクトップ姿で話しかける。
どんなに暑くても首まで有る薄手のインナーを一枚必ず身につけているが
今日はちょっと事情が違う。

ロックイーゼンの試合が終り選手達は暇になるどころかしっかりと個人強化日程が組まれて
好む好まざるを無視してトレーナーの指示を受けなければならない。
ラティーフはマイアーと同じトレーナーになったのはよいがトレーナーは器具を使ったトレーニングをメニューのほとんどに入れて非力なアネルにとっては辛い。

「そんなことないわとっても元気よ」無理して笑顔を作る。
バーベルを上げるの嫌いだけどバーベルはスティーブを盗ったりしない。

「聞いたわよ。プラネタリウムの約束すっぽかされたんですって」
マイアーは上腕三等筋を鍛えている
約束を反故にされる・・ことは当人とっては辛いことだが他人から見れば興味の対称になる。

台に片手を置き視線を一定にして鍛えている筋肉を意識しダンベルを挙げて下げてを繰り返す。
「それはいいの」
トレナーのクルールが正しく動作を繰り返しているかチェックしながら運動器具の間を歩いている。

「良くないわよ先に約束したのはこっちよ」
クルールの姿が器具のシルエットの中に隠れる。息を吐きながら話す。

「悪いって謝っていたわ、だからのそのことはもういいの」
アネルは手を止めて床の汗染みを見つめた。

「じゃなんでそんなに落ち込んでいるの?」
自然と言葉に力が入る。

「私って変?」
と、唐突に聞く。

「何がよ、何を言われたのよ言って」
とダンベルを持つ手をかえる。

「うん・・」
トレーナーのみ回りを気にしていないアネルは曲げた腕をだらりと伸ばし答える。

「あのね、スティーブがごめんって謝ったから、許してあげるから結婚してって言ったの。そしたら君は頭が変だって。半分冗談だったけど半分本気だったのスティーブだったら優しくて素敵だからいいなって。そのときの彼の目は・・まったくの他人を見る目つきだったわ。なぜあんなことを言ったのかしら」
と夢でも見ていたような口調である。

「スティーブがあなたとの距離を縮めたからよ」
プラネタリウムと聞いてデートの申し込みだと気がつかなかったと

は言わせない。
アネルに興味も無いくせにデートの約束までしてすっぽかし笑い者にしたスティーブに無性にマイアーは腹が立つ。
「私に話して気持ちが少しは収まるかしら。私でよければ食後にでもお部屋で聞きたいわ」
勝気なマイアーはこの施設の中では唯一の友人だと思っているアネルが
傷つき落ち込んでいるの見ていられない。

「そんな・・そうね聞いてもらえると気持ちが楽になるかも」
マイアーの申し出は嬉しかった。
選手は越えられない壁にぶち当たると心理療法士のドアを叩く。

トレーニングルームから出ると別メニューをこなしていたミリーにばったり出会った。
ミリーはこれから自主トレで運動器具を使ってトレーニングを始めるつもりであるおまけに筋肉至上主義のクルールはミリーを気にいって熱心にアドヴァイスをくれるのだ。
「あら残らないの。時間外のほうが特別な話が聞けるわよ」
とアネルマイアーのどちらにとも取れる形で話しかける。

「あたし達の身体には十分な練習だったわ。又後でねミリー」
近寄りがたい美しい顔をでミリーを見下してマイアーが笑う。
いったい何組みのカップルを別れさせれば気が済むの・・とマイアーの目が問いかける。

ミリーはこの挑戦的なマイアーが大嫌いだ。
なんと言っても神々しいばかりに美しいなんてミリーには許せない。
今もマイアーに見据えられて軽口の一つも叩き返せなかった。
この世で殺したいほど憎たらしい人間が居るとすれば後姿のダンジ

ェルマイアー。

「アネルまだ落ち込んでいるのね。悪い事をしたわ」
今回は故意に仕掛けたつもりはなかった。
「何をしたんだい？」
クルールが頭板状筋から頭長筋のはり具合を見ている。
「こういうのをなんて言うのかしら早く言えば横取りかな、そんな気はなかったのに。悪いのは気持ちが変わったスティーブなのに」
「三角関係かい。良くあることさ」
「ぜ～んぜん、違うわ。だって私スティーブが好きじゃないもの」
マイアーの彼氏だったら落としがいもあるが偶然そばにいたスティーブを最後だと言うプラネタリウムに誘った、時間はラティーフとの約束よりも早い時間に。
待ち合わせ場所に少し早めに着ていたラティーフがミリーとスティーブが仲良く出てきた所を見てしまった。
「横突間筋が弱いなー。多裂筋もだな。持久力と平行してこれは鍛えるべきだな」
「それって必要事項に書いておくべきことかしら」
「いや特別弱いわけじゃない、背骨は頚神経、胸神経、脊髄神経が集まっている場所だ鍛えて置いて損はない」
「そうね」
クルールは真っ直ぐに通った背骨を守るように背骨よりも四センチは高い美しい盛り上がりの腸肋筋を撫でている。

「今日来ていた人の中で誰が一番素晴らしい筋肉だった？」
毎回思うがこんなに魅力的な女性がそばに居るのにまったく顔も見ないで会話を続ける男性も珍しい。

「ダメなのはいたけどね。そもそもここに来るのはイマイチの筋肉の奴が来るんだ。ン～～一人だけ細胞レベルで調べたい人間が居た

けどね。合わないんだよね筋力と跳躍力やら・・僕の集めた数値の範囲に入らない筋肉があるんだね」

「じゃ、一番良くない筋肉な人って誰よ」

「わずかな数値の差だよ。突出していおるわけじゃないんだ・・」

そういいながらクルールは片手分の名前を上げて見せた。

ラウンジ

ラウンジでは一冊の雑誌を前に感極まった声やため息が漏れている。ドアを蹴飛ばしてＰＣ片手にノートンが飛び込んで来て雑誌の横に並べる。
雑誌の掲載は二十位までだがＰＣ画面には選手全員の順位がある。

「明日の朝発売なんだろう?本当の順位かよ」と嬉しそうな声でクロンク。
「へっへっへっ。残念だなこのレイステンでは明日の朝だがトマホーク市ではもう発売されているんだ」
ＰＣ画面の順位の雑誌は手元には無い。トマホーク限定の雑誌らしい。
「わかった。日付変更線だな」

「そういうこと。トマホーク市の奴の書き込みさ」
ノートンがＰＣの前から押しのけられ次から次にその場に居た人間が画面を覗いては番号を確かめる。

「へー、以外だな・・トップテンまでは納得できるけど二十位までは何処で選択したのかわからないぞ」
中央テーブルに集まった三十人が雑誌とＰＣ画面を見終わると全体に騒がしい華やいだ雰囲気になる。

「誰を見ているんだ」
指先に有る名前を見て、

「う～～ん、彼か」
名前はナルバントグル。

「噂じゃ、今度の美しい筋肉の一位に選ばれるとか言っていたな」
雑誌であろうと自分の名前が載るのは気分がよい。

「クルール情報か？あいつあの雑誌の監修をしているらしいな」
筋肉と聞いたらクルールと条件反射のように名前が出る。

「俺よクルールのあの目つきが嫌なんだよ人間としてみてない気がしてさ」
皆が見終わって放り出された雑誌をめくりながらもう一度確かめる。
ある・・俺の名前だ。

「いつか筋肉を取り出して顕微鏡で見られるかもしれないぞ」
しかめっ面をしながらいう。隣の女性がうなずく。ありえる話だと。

「マジ、似たような事言ってた」
真向かいの男性は何度もミリーとクルールの話をそばで聞いている。

「実際に研究施設じゃアスリートに電極貼り付けて走らせたり飛ばせたりして調べているんだろう？」
半分笑いながら憶測で言う。雑誌の受け売りだ。

真ん中にいた男が立って左肩を少し後ろにずらし目を右斜めにやってポーズをとる。
「君は半腱様筋が強いね。しかしそれを活かしきれていないようだ」

中央テーブルの周りだけでなく窓際の席に座っている人間にもその真似は伝わり
ラウンジ全体がどっと笑う。

「おかっしい・・似てるよ。悪いがクルールだけが筋肉狂だと思うなよ。何とその雑誌の購買数たるやスポーツ誌のトップをいってるんだぜ。だからよ。この二十位までの選手層にはマッスルマニアの票が集まっていると考えていい」
涙眼になりながら言う。

真似をした男に親指を立てて賞賛する。ナイス。

「え！一位と十一位が五十万票差ってことは・・ほう！ファンの五人に一人は筋肉フェチ？だな」
各国の票だけどこのレイステン市に居るマッスル狂の数を想像して顔をしかめる。

「そうなるね」くっくっくっくっと真似がつぼにはまって笑が止まらない。

「まともなファンが選ばれることを願って乾杯！」
お調子者が水の入ったグラスを高々と上げる。
ノリのよい十人が中央テーブルを囲んで立ち上がり乾杯を叫ぶ。

「嫌だクルールと同じレベルのファンが来るの？」
と女子代表のミリーの黄色い声。

「最悪」
なぜか隣に居たミリーマキも同調する。

「いないとは限らないな、以前にも変質狂といったら怒られるが、何人か問題を起したファンはいるがね」
変質狂に当たったことは無いが過去事例で騒動が起きて禁止規約が増えたことは確かである。

「運だよ。よいファンかどうかはわからないが有名税だと思って一日楽しく過ごしてくれたまえ」
二十一位だった男はしたり顔で真面目に思案している顔の隣の男を見る。

「私その手のファンレターたくさん貰ってるから確率高いわね」とはミリー。

「そうとも言えないね。ここを読めよ。十位以下は皆素晴らしい肉体の持ち主ばかりである。ファンはこの素晴らしい身体を持った選手達の活躍を願って票を入れたようだ、とある。」
「それじゃクルールレベルはは十位以下に集まっているの」魅力的な笑顔を隣の男性に向ける。
「この解説だとそうなるね」
安心して十以下の選手の名前を見る、一人まったく関係無さそうな選手も居るがこの場合どうでもよい。

話の流れを長椅子の片隅で聞いていたラティーフは青ざめた。
十八位に自分の名前がある。

「ねぇ、そんなファンと一日一緒に過ごせないわ」
会話は顔を見てするもので腕や足、背中を向けてなど出来ない。
「大丈夫よ選ばれた二十人には指導員がついてレクチャーしてくれるのよ。解らないことがあったら聞いて二度感謝祭には出ているから」
小声でとマイアーがうなずく。

テーブルを挟んで正面にはミリーがすねた口調で騒ぐと
取り巻きの男性陣はその笑顔に張り切って我先にと答えている様は

滑稽である。

ファンとの集い

昨夜の雨でレイステン市の空は洗い流されて乱立するビル群に囲まれた海も白波が立ち対岸の港の船が良く見える。

今日も巨大な娯楽施設は花火を打ち上げて開園を宣言する。

青空が広がる眺めの良いホテルの一室では気分の良い朝が訪れていた。

ルーサーは浮き浮きした気分で何度もタイを閉めなおし外してはスカーフに替えたり、ポケットチーフの色を上着と合わせて悩んだりと鏡の前で忙しい。腕時計を気にしてもう一度全身をチェックすると駆け出すようにして部屋を出て行った。

パタンと締まった扉を二人の男が見ている。

一人は手持ち無沙汰のクリス。

クリスが書棚からファイルを取り出してパラパラとめくり始めると、

「何か？人員配置に問題でもあるのか？」と湿った声でテット。

ルーサーの去ったクローゼットの収まりきれない服を無理やり戸を押してクリスの隣にやってきた。

クリスの出したのは巨大娯楽施設の平面図、最後のページはたくさんのアトラクションの入り口にチェックが入っている。

今日のガードは八人を配置してある。

「別に、車を使わないようだから俺も行ってみようかと思っているだけだ」

クリスは主に車の運転を担当している。

昨日レイステンまで走ってきて今日はホテルの室内勤務だ。

「珍しいな。あんな機械のおもちゃなんぞ乗りたくないって言っていたじゃないか。まぁ国に帰ったら乗れないからな。乗っておくのも話しの種にはなる」

眼下の公園の向こう側にカラフルな色調の建物がメルヘンチックに並んでいる。

お前も行ってもいいぞちょっとの間目をつぶってやるとテットがウィンクをする。

テットのウィンクを受けて肩をすくめる。

「見たいのはルーサーの顔だ。あいつどんな顔をしてスターと会うんだろう?」

四十に届くというのに大型遊園地になどクリスは興味は無い。

「なんだそんなことか。いい年してあんなものに傾倒するとはな」

毒されている・・とテットは顔をしかめてみせる。

「子供らしくて可愛いじゃないか。賢いだけじゃなくて感動する心も持ってるんだぜ」

テットが書き込んだメモを読みこれらのアトラクションに長時間立って並ぶだろうかと首を傾げる。

「感動?あいつは脳みその使いすぎでおかしくなったんだ。それと

も馬鹿を演じているだけかもしれない、賢い奴は何を考えているのか解らないからな」

テットの前には国から送られてきた書類、大臣クラスの要人のスケジュールをルーサーの予定表に書き込む。

「テットはルーサーに厳しすぎるぞ・・」

クリスがファイルを閉じてルーサーを待ち伏せできる場所を頭に叩き込むとテットの好奇に満ちた目を無視して目立たない服装に着替えた。

といっても娯楽施設の中でグレーのスーツやサングラスで動き回るわけではない。

大きな花柄の蛍光色のシャツと水色のハーフパンツで決めて、おどけながら部屋を出て行くとテットもつられて笑顔になる。

大感謝祭と銘打った割には観客は無し。ルーサーが常宿にしているホテルから離れて三軒目のホテル、オーケーシュストグループ出資の派手で豪華なつくりのスカイラウンジが指定された場所である。

当日、ロックイーゼンの選手一人に一人の記者が付き添い
待ち合わせの場所に係員に誘導されたロックイーゼンファンが
当選したチケットを手に緊張しながらやってくるとホテルのレストランの前で選手と握手して記念撮影。撮影が終わると記者はニ三質問をして次の選手のもとへ。

係員の説明を受けていたファンはレストランに入り憧れのスターと昼食。

その後は巨大な娯楽施設で半日、スターとデートが出来るという企画である。

ルーサーの順番は最後、緊張の面持ちでレストランの入り口を見つめて居る。

たまたま入れたあの一枚の紙切れが誰かの手の中に納まりルーサーが選ばれている。

感謝祭の企画は雑誌とのタイアップでロックイーゼンのピックアップされたスター特集号に掲載される。
もちろん選手達は競技中のように顔にペイントは無い。
普段の顔で現われるが掲載される顔にはしっかりとペイントの模様がいかにもペイントを付けたままファンとデートをしたかのように加工される。
選ばれたファンもこのデートの応募条件の中に守秘義務の誓約書にサインしてこの場所に来ている。

選手が遠征に行く道中着ているスーツに身を包んだアネルが係員に案内されて入ってくると
窓際の席から素早くルーサーは立ち上がり、ロックイーゼンのスターアネルの元へ近づいていった。

ルーサーを探していた係員は極上の微笑を浮かべ会釈をして一歩下がる。

ロックイーゼンランキング読者が選んだ上位ニ十人は
特別室でファンとの接し方をレクチャーされ、アネルは教えられた言葉を百回練習し口から出す事が出来た。出だしは上々である。
「あなたが抽選でめでたく当たられた方ですか。おめでとうございます。私がベルデのアネルです。競技用のお化粧をしていないのでがっかりされたかもしれませんが」
ここでにっこりと笑う。
「今日は一日一緒に過ごせることをうれしく思います」
と握手のつもりで手を差し出す。

「僕はアルヴァー・ルーサー・フォルスストロム。ルーサーと呼んでください。ミズ・アネル、食事はお済みですかよろしければ少しおしゃべりをしながら軽食でも如何ですか」

アネルの後からすぐに来た記者が二人の前に回りこみスマイルといって一枚写真を撮って消えた。

たかれたフラッシュの光が目に入り何処を見てもアネルははっきりしない。

確か左側に立っていた・・左に頭を傾けて笑顔を作る。

ファンをがっかりさせてはいけないとの配慮だ。

「喜んで。朝から緊張していて何も食べてませんの。去年はベスト選手に選ばれなかったので、始めての経験で・・」

自然に、フレンドリーに、気さくな印象をもたれるように・・

記者を避けて右側にたったルーサーではなくボーイに差し伸べたアネルの手がボーイの服の裾を掴みさりげなく払われる。

右側から軽くアネルの腕を取り自分の腕に絡ませる。

アネルの腕に羽根が生えて飛んでしまいそうできつく握り締めたい衝動をルーサーは押さえ込む。

「座ってから話の続きを聞きましょうか」

ルーサーに促されて改めて違う人間に愛想を振りまいていたことに気がついた。

「そうですわね」顔から火が出そうである。

ルーサーはアネルの腕を軽く握り窓際の席へ。

嫌だわ変に思われなかったかしら・・とパンツスーツと同じ藤色のパンプスをテーブルの脚に打ち付ける。
アネルが椅子に座ると同時にルーサーが顔を近づけて、
「大丈夫ですか？」と尋ねる。
テーブルの足が折れそうな大きな音がしたのだ。

「ええ」何が大丈夫なのかわからないまま返事をする。
当たったパンプスの先はへこんでいるが足先は衝撃だけで痛くもなんとも無い。

隣のテーブルの客が二人を見ているのでアネルはこの二人のうちどちらかが大きな音を立てたと思っている。

まず両手を膝の上においてナプキンを広げる・・膝から挙げた手がテーブルの端に引っかかる。

マイアーの言った様に振舞っているのに、流れるように・・できない。
糸つきのマリオネットのように小首を傾げて窓の外の景色を楽しむ風を装う。
おもむろにファンの顔を見て微笑む。

と・・ルーサーはメニューを広げてアネルを見ていなかった。

アネルは緊張しすぎて何を食べたいか聞かれても笑顔を作りすぎて答えられない。
ルーサーはメニューを見ながら何処を見ているか解らないアネルの瞳を覗き込み暖かな色合いに満足している。
メニューを閉じると給仕係が丁寧にオーダーを聞き取って去った。

柔らかい日差しの中、ガラス越しに見える青い空のように曇りの無い笑顔がルーサーをうっとりさせる。

天気に始まって料理の好き嫌い、アネルの近況ととりとめの無い話が二人の間で交わされ
小一時間をレストランで過ごしファン待望の娯楽施設でのデートである。

記者はとっくにトップのスター選手を追いかけてレストランにいなかったし
レストランの一部の従業員以外はイベントとして使われたこの場所にはロックイーゼンの選手は一人残らず出払ってしまい、いつものレストランに戻り仕事を始めている。

窓際の二人が席を立ってもアネルに注意を払う客は居ない。
暇な給仕係がルーサーの美貌をさりげなく見て楽しんでいる。

ファンとの集いの後

ドアをノックする音が聞こえる。

ベッドに突っ伏して持ち上がらない頭でラティーフは考えた。
マイアーが訪ねてきたと解ったが体が鉛のように重くて動けない。
動きたくない。

「いいわよ」

とアネルの返事が聞こえたかは定かではないが
いつもと変わらないマイアーがドアから顔を覗かせる。

「どうしたの？わかったわ！ファンの近親者がいたのね当選を自慢するとね。親や兄弟従兄弟やうんと引き連れてくるのよ。ちゃんと書類で一人って書いてあるのにアトラクションの前で待機させてるんだからガードの人が大変みたい。人ごみの中を逃げ回るのって嫌ね。レースのほうがずっと楽だわ。ねぇ疲れているところ申し訳ないんだけれど、一つ聞いてもいいかな」
初めてファンと接したのアネルに同情しながらも、思いつた動きがあって是非ともアネルの意見が聞きたいマイアーである。

マイアーの元気な声に顔を上げられずに、
「一人」
とだけ答える。

高い天井を見上げてうっすらと残る手形を見る。
「部屋じゃやっぱりダメよね。スポットがあると緊張感に欠けるよね。何？」

マイアーがベッドで跳ねてつけた跡である。

重たい瞼を開けて、
「ファンの方は一人しかいなかったの」
何とか頭を持ち上げようと試みる。
目を閉じてやるだけのことはやったと心の中で言う。皆のようにはうまく出来なかったけど。

受け答えは丁寧にはっきりと、答えられないことは笑って誤魔化し、思想的なことや政治的なことは口にしなかった。
他の選手の身体の調子のことも口にしなかったと思う。
あと何を注意されていたっけ・・。
大事なファンは子供ではなく青年だった。ここにいるマイアーとならお似合いの一対になりそうな人・・
とにかくやり終えた。

見知らぬ人と半日一緒に過ごすのがこんなにも疲れることなのか、まだ身体中が熱を持ったように熱い。

「うっそー。それでその疲れよう?どうしたの?私とミリーが教えたことが間違いだったの。一人だけ信じられないわ。そんなに気を使わせる人だったの。リラックスして行きなさいって最後に言ったでしょう。ほんともうミリーの脅かしは効き過ぎよね。ガードの人がいるからさらわれたりしないのに、あの遊技場の警備員が厳戒態勢を強いているのよ。どこもかしこもカメラのリレーで追いかけられているわ。それにあなたが居なくなったら警備会社の面目丸つぶれよ。そんなに緊張すること無かったのにー」
コロコロと笑い転げるマイアーにつられて強張った顔に引きつった笑顔を作る。

「そうなんだけど。パンプスが・・合わなかったのかも。歩くと何か変なのよね」
靴のせいにしてみたけれどラティーフには疲れの原因がルーサーの優雅なしぐさであったと解っている。

最初二人並んで歩く時に僅かだが後ろを歩くので
背筋フェチとか下腿三頭筋フェチがラティーフの頭に浮かび
選んだ服がパンツスーツで顔以外は肌の露出が極めて少なく
ファンをがっかりさせたと申し訳なく思っている。
少しぐらいはファン心理を組んで腕や足の筋肉くらい見せて満足させなくちゃと。
暫らくするとミリーの言う選手の身体の筋肉に触りたいだけの変質狂ではないらしいとわかった。

が・・椅子から立ち上がるにも手を添えられる。
ポップコーンを食べるにも、コーンのバケットに趣味の良いハンカチがお手拭に登場。
階段を上がるにもルーサーの手が腰にさりげなく回り補助をする。
階段が終わると添えられた手はすっと外される。
そんなエスコートなどされたことの無いラティーフは
歩き出しの最初の一歩から調子がずれてギクシャクして一日を終えている。

「原因は靴ね。大量生産品だからそれで半日動き回るのは辛いわね。ねっ見てるだけでいいの。お願い」
広大な施設の中をファンの子供の手を引いて子供の親や親戚から逃げて楽しいアトラクションで子供のご機嫌を伺い夕食まで入れて七時間も走り回っていたとは思えないくらい明るい笑顔のマイアーである。

「少し元気になったわ。行きましょう」
アネルはどこもかしこも顔までも要らぬ緊張で強張って重い。

半日デート・・後

ロックイーゼンファン感謝祭の特集記事が載ったのは一ヵ月後
一番人気のスター選手が表紙を飾り美しく強い競技者達と見出しが続き
ページをめくればスター選手の競技中の美しいアングルでとらえたドアップのピンナップポスター。
改めて知る必要もないのに選手名とロックイーゼンに入る前の競技暦が傍らに表示してある。

ルーサーは窓際の席に立ったままアネルと半日一緒だった遊戯施設を背に雑誌を開いている。
「ラティーフ・セヴェール・・ラティーフ、いい名前だ」
とアネルの本名を口する。二人だけに共通する秘密の名前のようにルーサーには響く。

少し離れて暇なクリスがルーサーと同じ雑誌を読んでいる。
珍しく本を買って来いといったルーサーがどの記事を読むのか興味津々で
同じものを二冊買ってカウンターの影で広げて見ている。

ルーサーの見ているページをクリスは隅から隅まで目を通したがルーサーがつぶやいた名前は載っていない。

テットがルーサーの飲み物をつくりながらクリスの雑誌をちらちら一緒に見ている。

「なぁ、ラティーフ・セヴェールって何処に載っている?」とクリス。

「ん?何でそんな名前をお前が気にする」
妙にテットの言い回しが気になりクリスがテットの目を覗き込む、
テットは小さく笑いながら、あごで雑誌を示した。
「反抗期少年に頼まれたんだ。今朝教えたばかりだ。で、お前の好みの女は?国に帰れば賭け事なんぞ出来ないからな今のうちに頭を堕落させておけ」
テットはロックイーゼン警備会社からコネを使ってアネルの本名を調べ上げている。

クリスの開けたページにはミルレンブラントが微笑んでいる。
テットの調べた女の本名がコケティッシュな女だと知ると
「う〜〜ん・・・俺の好みじゃないな」と
ページをめくり最後のページで地味な紹介で終わっているアネルを見て

「俺なら顔は良くわからんが雰囲気でこの選手だな」とつぶやきすぐにもとのページに。
アネルを紹介したページには写りの悪いルーサーとアネルも小さく掲載されているのには気がつかない。

テットがお茶を出して戻ってきた。

「個性的で可愛いな。このミリィって選手は地方で人気があるんだ。ちょっと顔の作りがアンバランスなのが魅力なんだそうな」
「そうなのか。じゃこの選手は」
と、開けたページにはロサのレフティハルメスとアマリジョのダン

ジェルマイアー。

「クールビューティと・・女神様だ、この完璧な美しさ。この世に女神は光臨してきたようだな」

クリスに異論は無いがあまりにも二人は美しすぎて現実からかけ離れすぎている。

付箋代わりに左手を挟んでいたページをめくろうと機会を窺っていたが

テットがキッチンを離れる前にクリスは仕事に出かける時間になる。車のハンドルを握るとクリスは雑誌のことなどすぐに忘れてしまった。

クリスの雑誌は応接間のルーサーの雑誌と一緒にテットにダスターに投げ込まれた。

「同じものを買わなくてもいいだろうに。まったく何を考えているのやら」

ため息をついたテットの心も、終わりの無い流浪の日々に閉塞感を感じ、

言わなくても良い批判的な言葉が口に出る。

広いホテルの部屋の窓から広がる空の向こうには懐かしい顔が待っている。ルーサーとのホテル暮らしは何年たっても性に合わず、不便で退屈な国の生活に戻りたい気持ちは高まっている。

テットがプラテアドの故郷を思い出すと必ずセットで出てくるのはサガモア王。

毎回王の使いがガイネスの要人の細かいスケジュールを送ってき、数学、統計学、天文学、社会学、哲学、心理学、の高名な教授との授業を減らし、要人らの下調べした情報も取り入れて会見の順位を

つけ、ルーサーのスケジュール調整を始める。
この下準備をしておけばルーサーが帰郷しなんらかなの要職についた時スムーズに仕事がやりやすいとサガモア王は思っているらしい。

テットの見解だとサガモア王の権力は効力を失っているように思える。所有している土地は七千メートル級の岩だらけの山とプラテアド半島の一角だけである。
他の一族のように大きな産業施設を持っていないと言うことは金を産まない鶏を飼っているようなものだ。
王のバックには気炎を吐くバラディール将軍がいると聞いているが将軍は政治の表舞台には立たない。
ルーサーのバックグラウンドを固めるためにはモラドのバラディール将軍が一番なのだがこれはルーサーが嫌っていて話がまとまらないでいる。
他の半島の一族は古い産業を維持するのが精一杯で顔も見たことのないルーサーになど援助など出来ないのが現状である。

ルーサーが幼かった頃ガイネスにはプラテアドの人間が二代続けて王座に座るのを喜ばない人間が大勢居たがここ数年事情は大きく変わっている。
七つの半島の長老はガイネスという枠組みから外れて独自の権力を持つことを望み始め
ガイネスが多くは七つ、少なくとも三つに分かれるという選択肢が囁かれる中にある。
ガイネスが分裂すればテット等の帰る場所はなくなる。

昨今金銭を目的にした誘拐も毒殺者や暗殺者という刺客もルーサーが大人になると激減し、
今度は変質者、狂信者がルーサーの周りをうろつくようになり広範囲に警護が必要になってもいるが現代社会のよさは何処にでもカメ

ラが設置してありその映像の死角を補えば少人数で警護が出来るようになっている。
刺客に怯える日々は消えたが今度は国が分裂する不安に苛まれテットは沈み込む日が多くなっっている。

フォークステット

格式あるホテルの深夜のエントランス。
昼間はソファーに座りくつろぐ客も多いが、客の間をきびきびと働く従業員の姿も無く、照明を落とし主な通路だけにスポットをあて明るくしている。

ドアボーイが礼儀正しく深夜の客を迎え入れ、磨きぬかれた床をこつこつとヒールの音を鳴らして女性が一人入ってきた。
若い女性はフロントにも寄らずエレバーターの前に立った。
フロントのホテルマンが目だけで追って手元の来訪者欄にチェックを入れる、
指定時間より一時間遅れている。

エレーベーターが最上階に止まると待ち構えていた男が女性の前に立った。
女性が遅れた理由を言い出す前に男は背中を向けて女性の前を歩き出しドアを開けた。

挨拶ぐらいしたっていいのにとむくれながら部屋に入ると部屋の中央には夜中なのにお茶の支度が整っている。
「悪いね、こっちへ着たら夜中だったものでね。明日にはモーニングも食べずに出なきゃならないんだ、書類は読ませてもらったよ学歴は最高だ秘書としては申し分ないね」
部屋には男が一人大きなソファーにゆったりと座り片手で座るように指示をする。

男の、申し分ないね・・の後は普通褒め言葉が続く。
褒め言葉が出ないということは何か気に入らないことがあるから。

私の何が気に入らないの？止まった言葉の続きを聞きたい。
「何か問題でも、夜中の勤務が多いとか」と嫌味をちくり。
椅子に深く座りすぎて飲み物に手を出せない。

大体夜の十一時に面接を指定するなど常識では考えられないと不満が心の中で爆発する。
最初は昼間の面接だったのにずれ込んでこの時間帯。
遅刻したコレットも悪いが高い給料に引かれて受けに来てしまっている。

コレット的に場所は泊り客の氏素性のしっかりした金持ちしか利用しない
古いホテルが面接会場ということもあって変なことはないと思っているが、
乗り気だった友人は面接時間帯が変わり断念している。
確かに真夜中にお洒落してホテルに入る姿は怪しい夜の女。
しかも相手は精力の有り余っている中年男性が部屋に一人。

絶対に怪しいとドアが閉まったと同時にバッグの中のスプレー缶を手の中に隠している。
「夜中には出来るだけ仕事はしないようにしてるよ」
と男は嘘をつく。仕事は人が寝静まった夜が大半だ。
「今は別だけどね」
と笑顔を作る。女性が警戒しているのも承知している。
「身体を動かすことは好きかね」
と足を組み替えて聞く。

「夜ですか？」
書類選考はよかったが面接では黄色信号が灯ったようだとコレットは感じている。

なのでまた似たような言葉を言う。これで面接はおじゃんだ。気の強い女は嫌われる。

「勘違いしないで欲しい。運動だよ何か続けているスポーツとかあるかね僕は社員には率先して勧めているんだ年に四回は大会にも出てる。僕じゃなくて社員に出てもらっている。健康になって欲しいという思いもあるが運動から何かを学び取って欲しい」

男は疲れた様子でこめかみを指でぐりぐりやる。

何かやらないと女と一緒になって軽口をたたいてしまいそう。今は偽者社長を演じている。

「それって強制的にやらせるって事？」

形のよい眉毛が上がる。

ワンマン社長の我が儘な方針に賛同すべきか、コレットは多少は目をつぶることにした。

入社してしまえば断る理由は何とでも作れる。

「僕が社長だからそういうことになる」

テーブルを挟んでコレットの首から肩の肉のつき具合は大した運動暦は無いとテットは見ている。

「どんな運動をやるの？ジョギング？ウォーキング、山登りとか・・」

と自分にも出来そうな運動を言ってみる。

このくらいなら許容範囲だろう。ただし一年に一度くらいなら。

テットはにっこり笑う、若い女は慎重で疑り深い。

「挑戦してもらうスポーツが好きでね。苦しみに立ち向かう姿勢ってのは仕事に応用できる」

愛想笑は得意だ。

じゃ山登りなんかいいわね、
サンドイッチと暖かい飲み物に綺麗な景色なんて最高だわと頭の中で描いて見る。
やれそうかも・・とコレットが想像しているのがテットには手に取るようにわかる。
「君みたいな女性はトライアスロンとかカッコイイかもしれないね。僕なら武道をすすめる。武道に興味は無いかね」
思わず本音が出る。

写真よりもずっと芯があって勝気な感じがテットは気にいった。
変な時間を指定したこっちも悪いが様子見に来たのだろうが
予防線を張って警戒している様は高感度がぐんぐん上がる。

「トライアスロン？武道」
フンと鼻で笑う、
「ごめんなさい運動は嫌いなの」
世の中には運動に向いている人間と不向きな人間の二種類がいる。
コレットは後者で自分には運動など不要だと思っている。

「そうか残念だね、う・・・ん今日の結果は紹介者を通して連絡しよう。それでいいだろうか。遅くまで付き合わせてすまないね。秘書がいないと色々困ることが多いものでね」
無理強いはすまい。本人からの自発的な衝動で無いと長くは続かないものなのだ。

「ガイの声を聞きたくないの直接知らせてくれるかしら。聞いてもいいかしら私の前に何人面接を受けに来たのかしら」
従兄弟のガイは書類審査で落とされているコレットを面接にまでたどり着かせたらお礼を貰う約束が出来上がっている。仕事が決まれ

ば別代金として請求される。
「君で五人だ九時に空港についてホテルについたのが十時近かった。遅くまでつき合わせてすまないね」

五人・・ね、五人のうちひとりが選ばれるか全員駄目かどうでもいいわ私の就職は無さそうだもの・・とさっぱりとコレットは興味を失った。運動すぐらいなら就職出来なくてもよいのである。
「私の携帯電話に直接かけてね」
ガイには会わなかったといっておこう、出費は抑えなきゃ。

「君の父上に知らせなくてもいいのかね」
コレットの父親は市議会院、顔の広さをちょっとだけみせる。
子供の就職の合否を知りたくない親はいない。

「失礼ね二十歳を超えているのよ」
一人暮らしだって始めたのよ・・とは見知らぬ人間には言う必要など無い。

「今日は来てくれてありがとう。外にいる男にホテルのチケットを貰って帰ってくれ夜遅く出向いてきてくれた迷惑料だ」

コレットがスプレー缶を握り締めながら出て行くとテットは本格的に両手でこめかみを押さえる。
「学問だけの朴念仁」とつぶやく、
「今の女か?そんな風には見えないが」
コレットをエレベータの前まで送り届けてクリスが部屋に入ってきた。
「よっ社長」
「馬鹿言ってんじゃねぇ、これで最後だからな」

秘書募集なんぞテットとクリスの猿芝居である。
提案者はクリスだが女っ気の無いルーサーの警護に女性を入れようと
容姿端麗文武両道を求めているが思うような人間が集まらず
募集を繰り返すうちホテルに入る女性を見て
毎夜毎夜高級女性をルーサーが買っていると噂になっている。

堅物と思われるよりはましさとクリスは言うが
テットには国に帰るまでの暇つぶしにしか思えない。

ロックイーゼン

天井から床まである大鏡の前でいつも以上にきちんとテットはタイを結ぶ。
久しぶりに心は浮き立っている。

以前何度も鏡の前で服装をチェックしていたルーサーのことを冷めた目で見たことなど欠片もテットの頭には無い。

一週間前に面接で落とした彼女を駄目もとで食事に誘い、デートの場所はテットの思惑とは違っていても問題にならないくらいわくわくしている。
二十数年ぶりのデートである。

新聞を広げながらテットの様子を盗み見しては新聞を立てて顔を突っ込み思い切りクリスは笑う。
じっくり見ている風を装い新聞をテーブルに広げた時には真面目な顔つきに戻す。

一年又一年とセデル国の滞在期間を延ばされてテットは疲れ果てている。
四十人の部下を率いて落ち着いた風情を装ってはいても部下がいないところではぶつけられない怒りを汚い言葉を吐くことで解消しているのを何度もクリスは見ている。
テットは女性の話題でくつろぐ所を見たことが無い、誰かに義理立てしているのかと思うがそうでもない。

然らばとクリスは考えた。女性と面と向かって話す機会を作ればいいのだ。

一案を出した結果三十二番目の女をテットは気にいった。
「やってみるもんだ・・」と後ろで扉の閉まる音を聞きながらにんまり笑うクリス。

テットは少しでも若く見えるスーツを選んだつもりだが並ぶちょっとイケテない。
コレットとは十五も歳が離れていて少々気後れしているがあいたい気持ちのほうが上回っている。

デートの場所を変えればいいわとの返事は嬉しかったがしゃれたレストランでゆっくり会話を楽しみたいが彼女はロックイーゼン狂。

待ち合わせの場所で落ち合い闘技場へ向かったはよいが今日はロックイーゼンクライマックスレース。

闘技場に一歩入った途端コレットの表情が一変してレースの予想を甲高い声で話し出すのには参った。
観客が多くコレットがテットの腕にしがみついていなければ立ち去ってしまいたい。

コレットの指定した番号の席にテットは座るが周囲はコレットも含めて全員総立ち。
「最高!!ありがとう特等席だわ見て十二枚のモニターが全部見えるわ。右下のスタート口はレースが終わると表彰式もやるの!アネル〜〜私がついているわーーあなたなら絶対勝てる〜〜」

テットに抱きついてコレットは説明をしたが観客は巨大画像に自分の好きなスター選手の顔が映るたび名前を連呼するのでコレットの声は掻き消える。

「う、うるさい！黙れ。彼女の声が聞こえないだろう。やめろ！耳元で叫ぶな！」
しばしテットはガイネス国のこともルーサーのことも心配事は頭の中から消えている。

甚平サメの口に似た
横に平たいスタート口にスポットライトが当てられるとマイクを持った男が鈴なりの席を見回す。

「さぁ今期最後のレースだ皆楽しんでくれ！！」
男の声は明瞭で通りがよい。
「そしてー　最終選考に選ばれたのは・・・ナランハ3、アスル・セレステ3、アスル・マリノ3、ベルデ3、アスル3、アマリジョ3、ロサ3、ロホ3ーー！最終日いずれも残ったのはチームの精鋭たちだ！聞いてくれ。この声援を」

男はマイクを高く掲げて会場の声援を待つ。意味の無い返事に男は満足する。

「そして！ゲームをもっと面白くするために各チームの二位も参戦する！彼らだって馬鹿じゃないあの金色に輝く優勝杯を手にする最後のチャンスでもあるんだ。今期トップのチームのために動き回るかそれとも自分たち、セカンドの位置を持ち上げるために走るかは」

「神のみぞ知るーーーーーーー」と、一拍置いて長セリフ。

「躍動する鍛えられた身体。飛び散る汗！仕掛けられた罠を突破し水の中に空中に危険を顧みずチームのために飛び込むその勇気！誰

一人欠けること許さないゲーム！ロックイーーーゼン！！さぁ号砲の後に選手が飛び出すぜ。期待して良いぜ今夜の月は満月！皆で多いに吼えよう！！まずは選手一人ひとりに俺達の熱い心を送ってやろうじゃないか！！」

扇動するアナウンサーの反対側から
蝶ネクタイの男が現われてマイク片手に選手を紹介し始めると
観客席は総立ちになり自分の贔屓の選手の名前を連呼する。

両手を挙げ、選手が顔を見せ声援に答えると闘技場全体が熱気に包まれる。

「上手いなこのセリフを考えたのは誰だ。ケルニ？良いじゃないか。最初のつかみは最高だ」
とオーケシュスト。
スタート口の真上にある部屋で窓を全開にして地鳴りのような観客の声を楽しんでいる。
ビルはこの最終戦のために変更したアトラクションの数々が上手く起動するか機器の点滅に気を配る。

製作担当者は予算が足りないと訴えていたがオーナーであるオーケシュストが自分の持っている子会社のスクラップから資材を調達させて出来上がっている。

それに加えて迫力有る映像を撮るために
スカイカメラの台数を増やしホールドや壁にも穴を開けてカメラを埋め込み、
より近くに選手の息使いを感じさせるために落下地点の床にまでもカメラがある。

このレースで何台かのカメラは選手に激突されて使い物にならないだろうとビルは思っているが口には出さない。
カメラとか器具類の損失はすべてＴＶ局持ちだからである。

だが選手の怪我は別だ。
見た目ばかり奇抜に作っても選手に大怪我でも負わせたらと思うと始まってもいないのに早く終わってくれと願っている。
嬉しそうに強烈なライトの中浮かび上がる装置を見回しているオーケシュストに比べ
口数が極端に減るビルである。

こっそりビルはドア側に近寄り電気技師を呼び出した。
「ロブ、電源の供給量はまだ余裕はあるか？ＯＫ。もうすぐ天井を半分開けるスタートの空砲が聴こえたら明かりを半減してくれ。うん夜間使用のカラーガラスを使おうあれなら光源はあまり要らないだろう。そうだ。うん仕方がないんだ。クレーンを使っての高画質のカメラが増えて。頼むぜ」
観客席を減らしてクレーンを取り付けカメラを乗せたお陰で必要以上に電力の消耗が激しい。
最終戦が日曜日の午後でしかも晴れてよかったとビルは感謝した。

レース　1

「いくぜっ」
今ではチームベルデ３のキャプテンを務めるジリアスクの声に答えて、高さ十五メートルのスタート台から勢いをつけて七人は飛び出して行く。
ナランハ３、アスル・セレステ３、アスル・マリノ３、ベルデ３、アスル３、アマリジョ３、ロサ３、ロホ３、これに加えてチーム成績二位の同色チームも一緒に出走する。

左右のライトが、スタート地点から飛び出した選手の姿を綺麗に浮かび上がらせると観客席の応援は凄みを増す。
「これをそのままで伝えられないなんて、もったいないよね」とオーケシュスト。
放映される画像を思い描いて酔っている。

選手がばらばらと水面に吸い込まれ、設置された八つのスクリーンに観客の目が注がれる。
ライトに当たって水しぶきがきらきら輝く。

水中に白い気泡と黒い人影が交差しながら天井を岩に模した洞窟をくぐり抜けると白い砂地が現われる
濡れ鼠になった選手たちが息を整える暇もなく砂地を走り抜けて直立に切り立った崖をよじ登る。

「早いぞ！早いぞ！これまでの記録を塗り替える勢いだ！」
実況アナウンサーは手元の時計を見ながら解説を続ける。
「先頭を行くのはロホ。槍投げから総合十種に変えて成績を残し、今このロックイーゼンでトップスターに躍り出ているビーレル。素

晴らしい跳躍！素晴らしい筋肉の連動をご覧下さい！」

ムスカッドの壁は二番目に来る最も大きい高さの有る壁である。
頂上だと思える一段目の壁の向こうに又聳え立つ壁を見ると、
水の中から出て重たくなった身体で壁を登り詰め
その先に見えるムスカッド壁を選手達が見ると大幅に気持ちがダウンしてしまう。

「カル。大丈夫？ビックウェーブは私が下になるわ」とカスティルの隣で声をかける。
「悪いなアネル」
チラリとアネルを見て安堵の気持ちがよぎる。
「どうしたのよう？カル？肩が外れたの？」
足の速いヴァンニァがアネルの後ろから移動して苦しそうに腕を握っているカスティルの横に陣取る。
「入れられると思うが・・よし入った」
苦痛に歪んだカスティルの顔に何が起きたかをヴァンは理解した。

スタート位置でヴァンニァの前にはミリー。その前にカスティルが居た。
体の大きいカスティルはスタートの位置からの蹴り幅が少なく遠くに着水できずに後から落ちてくる選手の誰かに踏みつけられたのだ。
水深はあっても百人以上の人間が十二メートル四方のプールに飛び込むのである。
手前に落ちるか対岸近くに目標を定めるかで少しは選手同士のぶつかる衝撃を軽減できるが少しでも目測を誤ると速力をつけた人間がかかとからぶつかってくる。

ラティーフは一番危険な対岸壁近くに飛んでいる。そこなら落ちてすぐに洞窟に逃げ込めるからである。

それでも同じ場所に目標を定めている選手も多くいち早く水中を移動してもすぐにわずかの差で着水した選手の足がラティーフの足にもぶつかっている。

事故はスタートラインから落ちていく選手の隙間をぬってぶつからない場所に落下したが
息を大きく吸い込み潜った瞬間にヴァンより後に落ちてきたミリーの足がカスティルの肩を直撃した。
ぶつかれたカスティルは泳ぐことだけを考えて洞窟を脱出したが使えたのは左手だけで完全に右手は肩甲骨から外れて肩先は尖っている。

確かにミリーのかかとが直撃したが、偶発的な事故である文句が言えない早く潜らなかったかスティルが悪いのだと、ヴァンは唇を咬む。

ビックウェーブは足の速い三人が先に行き後から来たチームメイトの土台になり反り返った壁を乗り越える障害である。
いつもなら土台カスティルとアネルの二人で持ち上げるのだが、今の会話だと土台はアネルとヴァンでカスティルはその上に乗っていることになる。
二人で持ち上げるのだが体重の重いカスティルを引き上げることが可能だろうかと一抹の不安がヴァンにある。

ドンガの壁をカスティルはどうにかスピードを落とさず登りきる。
アネルとヴァンの目がカスティルの肩の辺りを見つめて空中に浮かぶきのこにジャンプした。

今はレースの真っ最中なのだ仲間のために良いポジションをとらな

ければと身の軽い二人は他のチームのえり抜きの選手と競いあって次の空中きのこの取り合いに参戦した。

ドンガの壁を登り、モメンセの河を空中きのこを利用して飛んで渡り終えハンマー海峡。

落ちてくるハンマーと狭い橋幅を行きつ戻りつ進み中央まで行けば闘技場の真上に開いた穴から外の風が無節操に吹いてくる。

「うわぁぁぁぁーー」と声を上げてばらばらと七名の選手が落ちていった。

落ちた選手たちの体重が橋からなくなると橋のたわみが大きく上下に震える。

カスティルは橋の上で歩みを止める。

「クッ」

バランスをとるために上げた腕が傷む。

「大丈夫よ、もう少し！」と後ろからアネルがカスティルに声をかける。

ラッキーなことに橋の中央まで先に行っていた選手は風で落ちてしまい

谷底から必死で這い上がってきている。

もっと手前で落ちていれば最初の砂地まで戻らなければならなかったからアネル達もかなりビビッていたがハンマーが風を遮り落下を免れている。

「先に行ってくれ」腕の痛みで足の進まないカスティルが叫ぶ。

「OK。アネル、スピードを上げるわよ」渡り終えたヴァンが答える。この先を二人で乗り切らなければとの決意が顔には現われてい

る。

五本ある橋の上をゆっくりと選手たちが渡り終え始める。

レース　2

次のアトラクションはビックウェーブ。
高さが三メートルから五メートルの反り返った岩の波が横幅四十メートルある。
目指すは三メートルの低い波の先。
高低差が激しくあるため最初のポジション取りが大事な場所である。
先を行くロホの三人の内の一人はすでに波の屋根に上っている。

「アネル、勢いをつけていくわ。お願い」とヴァン。
立ち止まったヴァンを置いてアネルはウェーブの下、ロホの選手の隣に両手の指をかさねてヴァンを待つ。
「いいわ！」一か八かだ。この役はいつもカスティルの得意技。
助走を軽くつけてヴァンは利き足をアネルの両手に乗せると、アネルも懇親の力をこめて波の上にヴァンを跳ね上げる。

反転してヴァンを放り投げた方角をアネルは見る。
「やったわ！私たちでも越えられるわよ」
体の軽いヴァンは一回転して波の屋根に上っていた。

そこへ遅れてやってきたのがカスティル。
青ざめた顔に安堵の笑顔が浮かぶ。
「やったなアネル、ヴァン、頼むぜ俺の肩」
カスティルの後からベルデのメンバーが走ってきている。

細いアネルの肩にその倍はあるカスティルが立ち両手を組む。
「あれ今日は逆？」ミリーはそう言いながら走ってきてアネルの両手に右足を、左足をカスティルの両手に置いて、踏み台にした。

「そぉれー」とカスティルとアネルの掛け声と同時にミリーは上へ放り上げられる。

飛び上がった波にミリーが手をかけるとそこにはヴァンが待っていてミリーを波の先から引き上げる。

ヒーリー、ホイ、フックス、ジリアスクと踏み台の二人を使って波に駆け上がると
ヴァンが悲壮な顔つきで下に居るアネルを見る。
「さっさと来て！」二人を信用してはいるものの自分の疲れ具合からカスティルの身体を心配している。

痛む腕を気遣いながら助走をつけてアネルの両手に足をかけカスティルが飛ぶと
ヴァンとジリアスクがカスティルの着地した波の先っぽから倒れこみながら受け止める。

最後はアネルだ。

助走を長くするためビックウェーブから離れて駆けだす、波の内壁に垂直になるまで足で登りつめ身体を限界まで持って行き
波の先に手をかけてぶら下がりざらついた波岩の上を指でじりじり登り詰めて宙に浮いていた身体を完全に波の上に乗せると待っていたヴァンがにっこりと笑う。
「急ぐわよ」
近くにはベルデのメンバーはヴァンしか残っていない。

次のアトラクションは全員でないとこなせない。
坂を下りると丸太がかかった橋がある。

くるくる回る丸太の上を苦も無く軽やかに駆け抜けて二人が通過していく。
隣では丸太がぐるりと回り通過中の選手三人が慌てて丸太にしがみつく場面が展開されている。

丸太橋を渡り終えると恐怖の峡谷越え。
鳥の巣状の大きな穴だらけの球体の中に入り込み
緩やかだが起伏の有る床面を八人一丸となって球体を抱えて八人全員で立ち木の間を走る。

ベルデ3全員そろうと重い球体を持ち上げてリーダーの合図で走り出す。
穴から出した足並みを揃える。

「右にヤシの木、クリア。十メートル先に左にヤシの木。いいか！ジグザグに走る！左！右方向一歩左へ真っ直ぐ。右に五歩移動。次左に二歩移動。修正一歩右。ギリギリ行くぞ真っ直ぐ！ヤシの木を通り越したらすぐに左五歩いや六歩。ロホに先に行かせるな！体当たりだ」
とジリアスク。
右方向からヤシの木の林を一番早く抜けるルートを別な林からやってきたロホも球体と同じ幅に広がっている間隔に目をつけて向かっている。

ロホはベルデを確認し速度を上げる。
ベルデとロホの速度が同じになりヤシの木の間に突っ込む。

刹那、拮抗していた力はぶつかり合いロホは三メートル後退し、ベルデはというとゴムボールのように弾け何度もヤシの木にぶつかり転げて止まった。

「立ち上がれ！ロホに先を越されたぞ！それ」
とジリアスク。頭を上げた先にロホの球体が見えた。

天と地が逆さまになった選手達は一人が穴に両足を入れると練習と同様に決まった位置に転がって這って戻り立ち上がる。
「前進！」
「何で負けたのよ！踏みとどまってよ！」
怒り狂ったミリーの声。
「そんなことを言ってる場合じゃない！足並みを揃えるぞ」
とジリアスク。

涙眼になったミリーがホイジンガー、フックスベル、カスティルを睨み付ける。
ミリーの声にカスティルが唇を震わせて抗議したが何も言わない。
勝ちたいのはカスティルも同じだ。
ここで勝てば来シーズンの契約時有利な立場で更新が出来るのである。

肩に不安を抱えていてもこの勝負に参加し勝利さえ勝ち取れば
オフシーズンに肩の手術をし完治させて競技に望める。
何よりも一位であることにこだわって来たカスティルだけに
肝心の右手に力が入らないのは悔しいのである。

「行くぞ！」
後方からアマリジョとナランハが追い上げてきているのが見える。
「フンッ！」とカスティルは痛む腕に力を入れて球体を持ち上げる。
「負けてたまるか！」ホイジンガーが両腕に力をこめて声を張り上げる。
軽いヴァンニァが持ち手ごと浮き上がりそうになる。

「GO！GO！GO！」
ベルデ3は真っ直ぐに走りこんできたアマリジョのそばをかすりながら曲がり
ヤシの木の間に駆け込む。
緩やかな下り坂に勢いがついてぐんぐんスピードが上がる。
「右に三歩又右だ。五歩左に二歩。今度のヤシの木の数は半端じゃないぞ」
「ロホが引っくり返っている。今のうちよー」
「軌道修正！右の大きなヤシの木を回るぞ」
「OK」
「くっそ。奥に小さい木を置いてやがる」
必死の形相で球体解除ラインまで走りこむと
ゴム製の檻はばらばらになり汗びっしょりの選手の姿が飛び出てくる。

「最後だ泳ぎきれ！走り抜けろ！」
ジリアスクの声をメンバーは走りながら聞き、

個人の加点ポイント地点、落差四十メートル、パールの滝つぼに向かう。

高さに足がすくむが美しく飛べばボーナスが入る。

縁に立って片足で蹴る者、両手を挙げポーズをとって両足で蹴る、
助走をつけて上に遠くに飛ぶ者と様ざまだ。
崖縁から飛び出した後腕を身体に巻きつけるようにして飛び込み、
力強く足先から入水し浮き上がる。
技の無い選手はそのまま万歳をして飛び込む。

落下中ひねりや回転と如何に自分の技が美しいか観客席に見えるよ

うに工夫して選手達は次から次に入水する。

もちろん滝つぼでは先に飛び込んだ選手は落下してくる選手を避けて水中を必死で潜って移動する。
泳いでたどり着くのはスタートライン近くの砂場である。
スタートラインの壁を右に見て濡れた体で壁をよじ登る。

余力を残していた選手がぐいぐいと疲れきった選手を抜き捨てていく。
この壁からはもう色で分けたチーム行動ではなく個人の力にかかっている。

砂地を走る間に電光掲示板でチームの点数を見ていた選手らは最後の踏ん張りを見せ、
先頭集団にいる数人はチームのことを考えピラミッドの天辺の押しボタンを押して下りた。

壁を登りきり骨組みだけのピラミッドに選手は入り込む。
タイムだけを考えればピラミッドの天辺にタッチしなくとも良いのだが持ち点の少ないチームは是非とも欲しい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0997x/

Caesalpinia sappan （　スオウ）

2011年10月20日08時29分発行